

62  
256

通韻

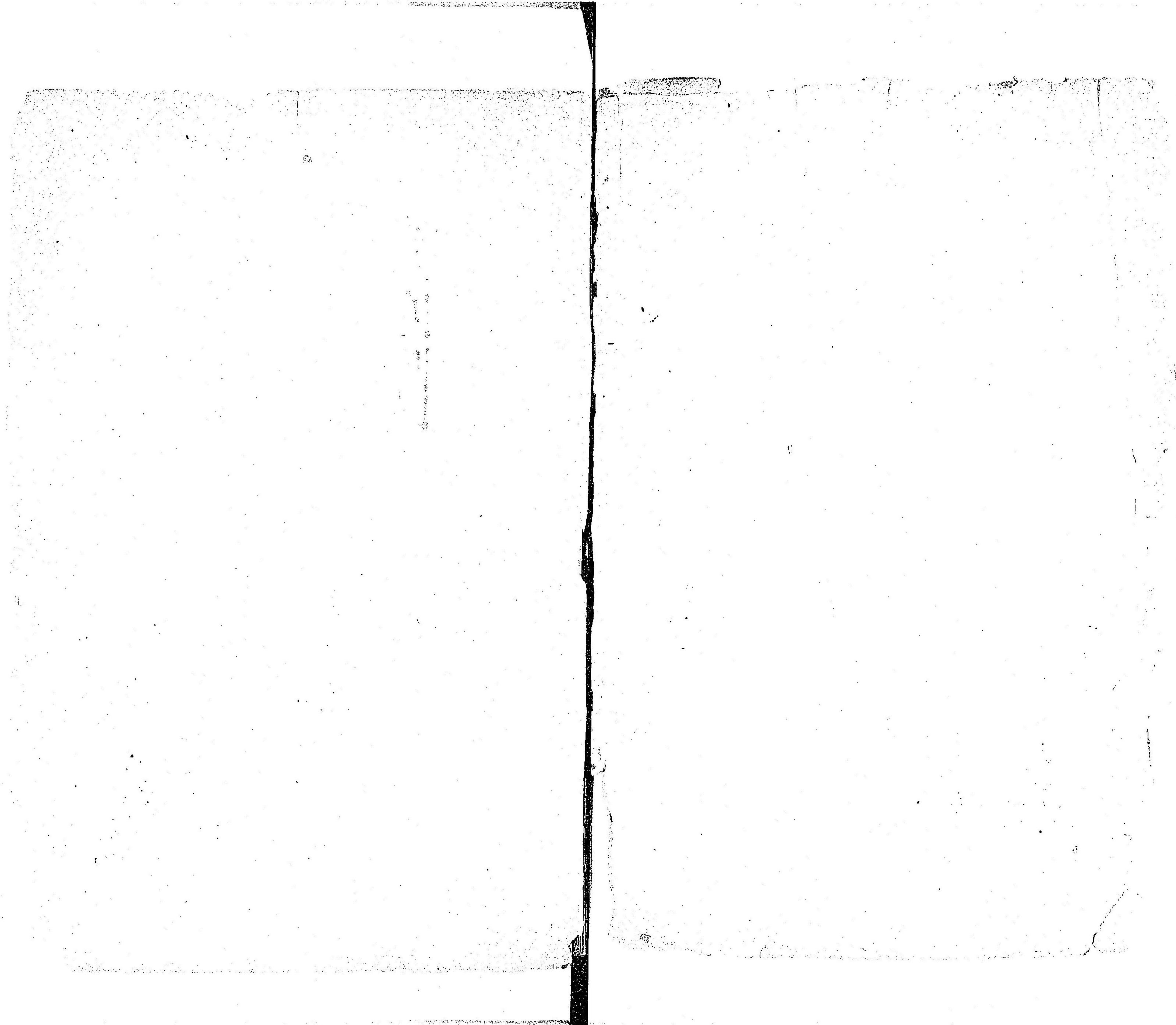
德

昔村山自彊 編纂

# 國語學文典

編前

東京 大倉書店藏版



昔村山自彊 編纂



國語學大典

東京 大倉書店藏版

德

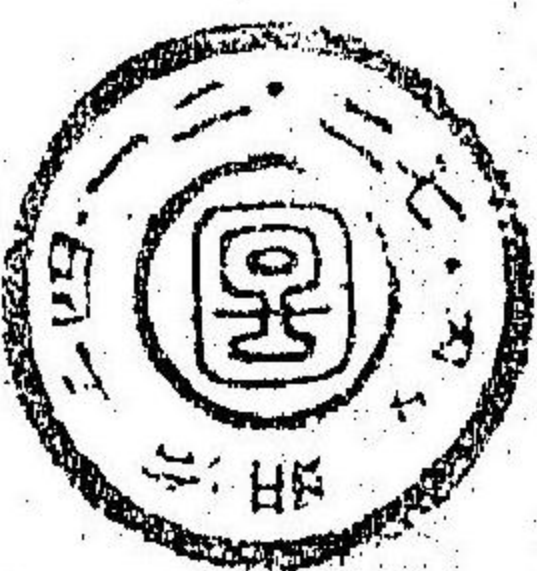
國語學文典

普通教育國語學文典

例言

一本書は普通教育一般の國語學教科用書を充んとする目的を以て編輯せしものふり

一普通教育の教科書は充んとして從來世間を流布せる國文國語の文典書類を見るに其説と所古風を泥まされは新奇を馳せ紛亂錯雜を涉らざれば鹿漏忽略を失し其分類區別の點に至りても井然たる秩序なく引と所の証例も古僻高妙を涉り未だ普通教育社會全般の腦髓を支配するに足らざるは普通教科書と云ふと雖も其實は然



二  
 かざるもの亦多し。本書は此等のものと其撰を異よし普通  
 教育修學上の程度を計り分類區別の順序に至りては三  
 たひ意を致し引く所の証例は古風に泥ます新奇を馳せず  
 專はら尋常普通語の精確優美にして尤も趣味あるもの  
 を擧げて以て普通教育社會實地の應用に供したり且つ  
 從來の文典は只其語格即ち名詞動詞助辭のみの區別を  
 をせしもの(語格も亦動詞即ち用言のみ委まらざる名詞代名詞  
 副詞接續詞等の分類に至ては甚だ疎漏なり本書は此  
 等の点も充分の意を用ひ精確なる分類の  
 法に従ひて周密的切なる區別を立てたり)のみ止りて未だ其  
 句格(一句を組立る所の造句法)及文格(文章和歌の全体  
 を組立る所の結構法)等を説明せしものあるを見ず名は文

三  
 といふと雖ども其實は文典中の一小部分に過ぎざるなり  
 本書は時に作法編の部を設け一句一節の作法より文章  
 和歌全体の組立法に至るまでを掲示して文典の全体を  
 大成せりさりながら我が日本文學界の範圍は甚だ廣く甚  
 だ大なるものなればたとへ普通教育上の文學をせよ編者  
 の如き非薄短才の能く一朝にして盡すべき所にあらず所  
 謂掛漏誤謬の處も定めて多からん博雅の君子幸よ是正  
 の勞を吝むなと充分の指摘を垂れ斯道斯學の開發を謀ら  
 ば是れ固より編者の希望する所なり

一本書の証例は大抵中古以下諸名家の文集歌集等より引

四

一用せり今一一其出處を示さざるものは煩を避けし爲めなり  
一近世の著書往往爵位名望學識ある人の題詠序跋を掲載  
して前後の見榮を飾る是れ所謂る羊頭をわけて狗肉を  
賣る者なり本書は斯の如き擧る致はず讀者其見榮なきを  
怪むことなけれ

一本書は元と全部一冊と志て刊行すべき筈なりしが携帶の  
便を計り編を前後に分ちて出版せり

明治二十四年十一月

編者識す

普通教育 國語學文典

前編目次

緒言 (一頁)

國學の効用

國語學の目的

國語學練習の三大部

● 洋音編 (五頁)

文字の四種

平假名

片假名

目次

國語學文典

二

眞假名  
變假名

合略假名文字の五種 (十一頁)

一音の合略字

二音の合略字

三音の合略字

八音の合略字

數音通用の合略字

聲音の十三種 (十四頁)

原音 (十五頁)

國語學文典

三

父音 (十六頁)

五十連音圖 (十七頁)

母音 (十九頁)

子音 (三十一頁)

濁音 (三十六頁)

半濁音 (三十八頁)

變音 (三十九頁)

拗音 (四十一頁)

省音 (四十三頁)

約音 (四十六頁)

目次

國語學文典

四

延音 (六十一頁)  
通音 (六十六頁)  
音便 (七十一頁)  
以上各證例

●言語編

言葉の三大別

體言

用言

助辭

體言の七種 (八十八頁)

名詞

國語學文典

五

代名詞  
數詞  
副詞  
接續詞  
感歎詞  
名詞の十種 (九十一頁)  
普通名詞 (九十二頁)  
特稱名詞 (九十三頁)  
示時名詞  
示處名詞 (九十五頁)

目次



國語學文典

六

- 示計名詞 (九十六頁)
- 解釋名詞 (九十七頁)
- 尊稱名詞 (九十九頁)
- 遜言名詞 (百一頁)
- 嘲罵名詞 (百二頁)
- 用言名詞 (百四頁)
- 用詞の組立
- 並立組立
- 反對組立
- 形容組立

國語學文典

七

- 名詞の性 (百五頁)
- 男性
- 女性
- 名詞の單複 (百六頁)
- 單數
- 複數
- 代名詞の六種 (百七頁)
- 自稱代名詞 (百八頁)
- 他稱代名詞 (百九頁)
- 特稱代名詞 (百十頁)

目次

指示代名詞 (百十一頁)  
 不知代名詞 (百十五頁)  
 疑問代名詞 (百十六頁)  
 代名詞の稱呼 (百十八頁百)

一人稱  
 二人稱  
 三人稱

指示代名詞の省略及増加  
 指示代名詞の通用 (百十九頁)  
 數詞の二種

固有の數詞  
 傳來の數詞 (百二十一頁)

副詞の九種 (百二十二頁)

虛字副詞 (百二十三頁)  
 名詞副詞 (百二十五頁)  
 代名副詞 (百二十六頁)  
 數詞副詞 (百二十八頁)  
 動詞副詞 (百三十頁)  
 形狀副詞 (百三十一頁)  
 疊言副詞 (百三十四頁)

漢語副詞 (百三十六頁)  
有尾副詞 (百三十八頁)

接續詞の六種 (百四十頁)

起語接續詞 (百四十一頁)

重複接續詞 (百四十三頁)

假設接續詞 (百四十五頁)

指示接續詞 (百四十六頁)

進步接續詞 (百四十八頁)

反轉接續詞 (百四十九頁)

感歎詞の五種 (百五十二頁)

欣賞感歎詞 (百五十三頁)

悲慨感歎詞 (百五十四頁)

怒罵感歎詞 (百五十五頁)

驚怖感歎詞 (百五十六頁)

呼醒感歎詞 (百五十七頁)

冠詞の二種 (百五十九頁)

體言冠詞

用言冠詞

冠詞の省略轉換及隅接 (百六十六頁)

體言の履冠 (百六十頁)

接頭詞 (百七十頁)  
接尾詞 (百七十一頁)

以上各証例

用言の二大別 (百七十三頁)

作用言

形状言 (百七十四頁)

作用言の二種 (百七十五頁)

正格作用言

變格作用言 (百七十六頁)

正格作用言の五種 (百七十八頁)

變格作用言の四種

加行變格

佐行變格

奈行變格

良行變格

- 作用言活語の原圖 (百七十九頁)
- 四段活用並表圖証例 (百八十三頁)
- 用言六種の詞格及三種の時機 (百八十五頁)
- 未然言
- 連用言
- 終止言
- 連體言
- 已然言
- 希求言
- 未來言

- 現在
- 過去
- 四段活用連用言の誤謬 (三百十六頁)
- 四段活用の活用概畧 (三百十八頁)
- 上一段活用並表圖証例 (三百二十五頁)
- 上一段活用の活語概略 (三百四十五頁)
- 下一段活用並表圖証例 (三百四十七頁)
- 下一段活用の活語概畧 (三百五十八頁)
- 上二段活用並表圖証例 (三百五十九頁)
- 上二段活用連體言の誤謬 (三百七十五頁)

- 上二段活用の活語概略 (三百七十七頁)
- 下二段活用並表圖証例 (三百七十九頁)
- 下二段活用連體言の誤謬 (三百九十七頁)
- 下二段活用の活語概略 (三百頁)
- 加行變格活用並表圖証例 (三百六頁)
- 佐行變格活用並表圖証例 (三百十四頁)
- 佐行れ四段活用下二段活用變格活用中の(し)と(せし)の區別 (三百二十九頁)
- 佐行變格活用の活語概略 (三百三十五頁)
- 奈行變格活用言表圖証例 (三百三十六頁)

- 良行變格活用並表圖証例 (三百四十六頁)
- 形狀言の二種 (三百六十頁)
- とーき活用
- とーしととーき活用
- とーき活用並表圖証例 (三百六十一頁)
- とーしき活用の活語概略 (三百六十九頁)
- とーとーとーき活用並表圖証例 (三百七十一頁)
- とーとーしとーき活用の活語概略 (三百八十四頁)
- 用言の轉用 (三百八十六頁)
- 用言轉用の三種 (三百八十七頁)

佐行下二段活用は轉用する者  
 良行下二段活用は轉用する者  
 良行變格活用は轉用する者  
 佐行下二段活用は轉用する單活の表圖 (三百八十八頁)  
 佐行下二段活用は轉用する複活の表圖 (三百九十頁)  
 良行下二段活用は轉用する單活の表圖 (三百九十三頁)  
 良行下二段活用は轉用する複活の表圖 (三百九十四頁)  
 四段活用より良行變格は轉用する順序 (三百九十七頁)  
 形狀言より良行變格は轉用する順序 (三百九十八頁)  
 良行變格活用は轉用する表圖証例 (三百九十九頁)

用言の自他 (四百一頁)  
 用言自他の二種  
 自動  
 他動  
 自動詞の二種 (四百三頁)  
 自性動詞  
 被性動詞  
 自性動詞九種の表圖及証例 (四百四頁)  
 被性動詞六種の表圖及証例 (四百十二頁)  
 他動詞の二種 (四百十七頁)

- 他性動詞
- 令性動詞
- 他性動詞七種の表圖及証例 (四百二十頁)
- 令性動詞十種の表圖及証例 (四百二十七頁)
- 用言の尊敬 (四百三十四頁)
- 用言尊敬詞の八種 (四百三十五頁)
- 尊敬詞第一四段活用中佐波兩行の表圖及証例 (四百三十六頁)
- 尊敬詞第二佐行下二段活用の表圖及証例 (四百三十八頁)
- 尊敬詞第三佐行變格活用の表圖及証例 (四百四十頁)
- 尊敬詞第四四段活用奈良兩變格の未然言より佐

- 行下二の單活連用言の轉用するものの表圖及証例 (四百四十二頁)
- 尊敬詞第五上一段下一段上二段下二段加行變格
- 佐行變格活用の未然言より佐行下二段の複活連
- 用言の轉用するものの表圖及証例 (四百四十四頁)
- 尊敬詞第六四段活用奈行變格良行變格活用の未
- 然言より良行下二段の單活に轉用するものの表圖
- 及証例 (四百四十八頁)
- 尊敬詞第七上一段下一段上二段下二段加行變格
- 佐行變格活用の未然言より良行下二段の複活



國語學文典

轉用するものの表圖及証例 (四百五十頁)  
尊敬詞第八四段活用 佐行變格 奈行變格 良行變格  
格活用の未然言より 佐行下二段活用 連用言令(セ)  
語の延音(オメ)は轉用するものの表圖及証例 (四百五十四頁)  
以上

普通教育 國語學文典前編目次終

普通教育 國語學文典

村山自彊

緒言

國語學の効用 國語學の目的 國語學練習の三大部  
國語とは我日本國人固有の言葉なり夫れ吾人の思想を  
表はして日用の便を計り又之れを遠隔の人と通し後世  
の人と傳ふと欲する者皆此言葉に依らざるは無し(効用)  
此言葉は吾人の口より出す所の聲音に依り事物の名  
目動作形狀趣向等を示すものよて此聲音の目標を文字  
と謂ふ故に國語學の目的は我國固有の言葉の法則を

従ひて平生の談話を正志とし又善と文を作り歌を詠み吾人の思想を充分に言ひ顯はすものなり(目的) 因て此目的を達せんとするよりは先づ、聲音の原を詳かよし文字の形を知ら次は言葉の種類と關係を知り古今の文歌は付き之を解剖して其組織を覺り後、文を作り歌を詠み正と説話を爲すことを努むべし是を以て此編は左の三大部に分ち國語學練習の用は供す

第一部 聲音及文字の調へ

第二部 言葉の種類及關係の調へ

第三部 古今文歌の解剖及組織の調へ

第一部を聲音編と爲し第二部を言語編と爲し第三部を文歌作法編と爲す 抑く我國語の種類を分ち其運用を示志しものは加茂真淵本居宣長平田篤胤諸先輩の功勞最も多し故に斯編も亦大抵根據を彼の諸先輩の説に取ると雖も名稱等に至ては時世の異なる勢ひ同うすべからず且つ諸先輩の説の足らざる所は往々之を補ひ増すもの有り是れ已むを得ざるよ出るなり讀者幸に前人未發の所に至り故らば古人と意見を異とすると答むる勿れ

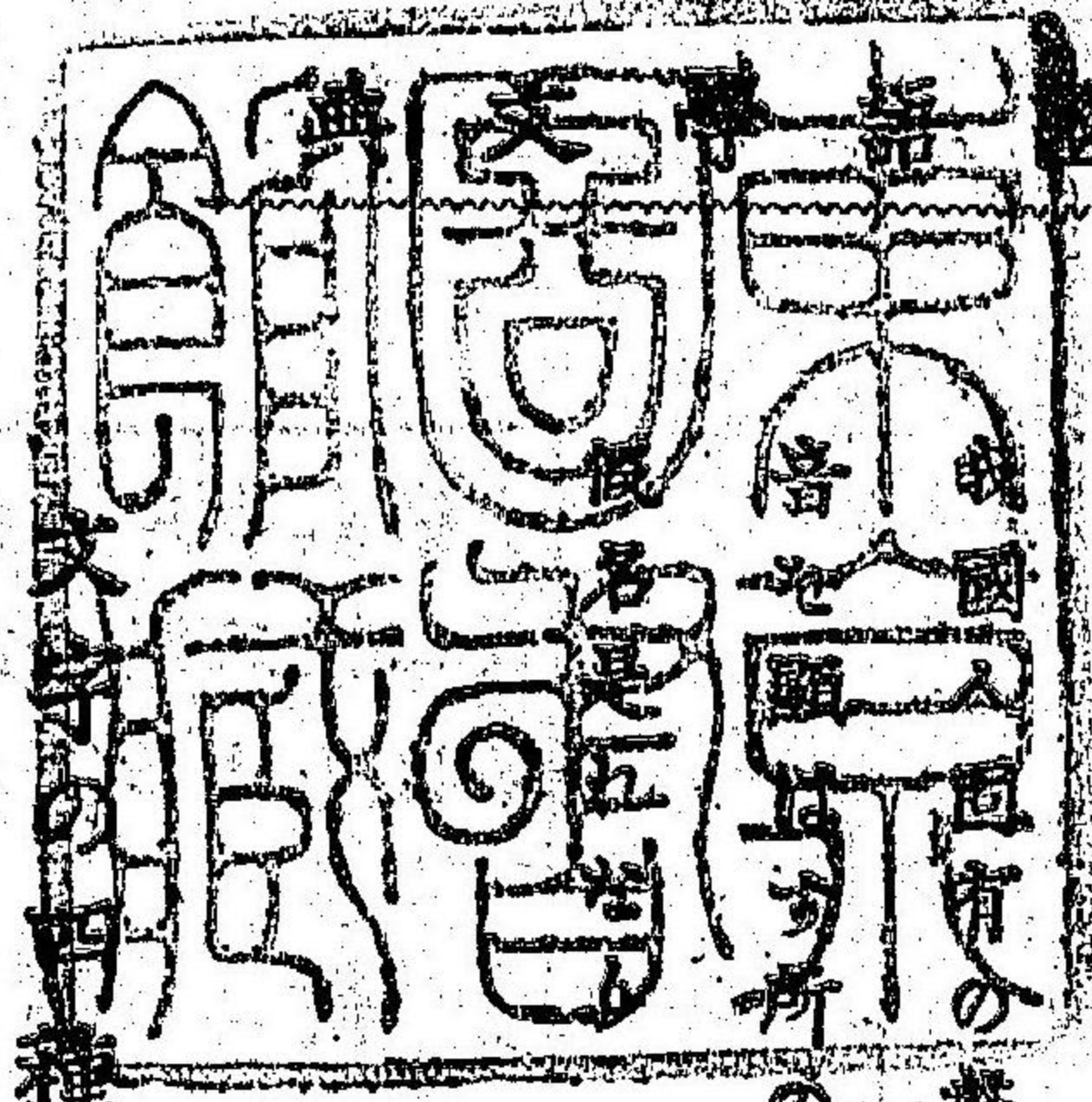
聲音の調

聲音編

文字の四種

平假名 片假名 眞假名 變假名

我國人固有の聲音は其數五十あり之を五十音と稱す此五十の聲  
倍々顯し出す所の文字は四種あり曰平假名曰片假名曰眞假名曰變



平假名  
片假名

眞假名  
變假名

聲音編

國語學文典

七

聲音編

多行			
た	タ	多	ゐ
ち	チ	知	ぢ
つ	ツ	爪	づ
て	テ	天	て
と	ト	止	と

佐行			
さ	サ	佐	さ
し	シ	之	ぢ
す	ス	須	ず
せ	セ	世	ぜ
そ	ソ	曾	ぞ

國語學文典

六

平第一 假一名は	片第二 假一名は	眞第三 假一名は	變第四 假一名は
阿行			
あ	ア	阿	ゐ
い	イ	伊	ぢ
う	ウ	宇	づ
え	エ	江	ぜ
お	オ	於	ぞ

其例を擧れば

加行			
か	カ	加	ゐ
き	キ	幾	ぢ
く	ク	久	づ
け	ケ	介	ぜ
こ	コ	古	ぞ

行也			
終	也	ヤ	や
言	以	ト	わ
遊	由	ユ	ゆ
遊	衣	ヱ	え
余	與	ヨ	よ

行末			
ほ	末	マ	ま
見	美	ミ	み
望	武	ム	む
勉	女	メ	め
毛	茂	モ	も

行波			
と	波	ハ	は
飛	比	ヒ	ひ
油	不	フ	ふ
唇	邊	ヘ	へ
不	保	ホ	ほ

行奈			
取	奈	ナ	な
又	仁	ニ	に
努	奴	ヌ	ぬ
ぬ	禰	ネ	ね
此	乃	ノ	の

行 良			
麗	良	ラ	ら
麗	利	リ	り
麗	留	ル	る
麗	禮	レ	れ
麗	呂	ロ	ろ

行 和			
和	和	ワ	わ
和	韋	井	み
和	于	ウ	う
和	惠	エ	え
和	乎	フ	を

以上第一のあい等は所謂いろは假名なるものなり第二のアイ等は元と漢字の一篇一画を取りて名けしものなり第三の阿伊等は漢字の眞体を假り用ひしものなり第四の阿梅等は漢字の艸体を假りしものなり哉國素と文字無し凡べて之を支那の字と假り來て聲音の名目を表はすゆる假名の稱へあり

合畧假名文字の五種

五十音四種の假名文字外より又聲音を合せ疊める省畧の假名文字あり分て五種と爲す一音の合畧字、二音の合畧字、三音の合畧字、八

音の合畧字、變音にも通して用ゐる合畧字是れなり

一音の合畧字

二音の合畧字

合畧文字の五種 三音の合畧字

八音の合畧字

數音通用の合畧字

其例を擧げれば

五種の合畧字

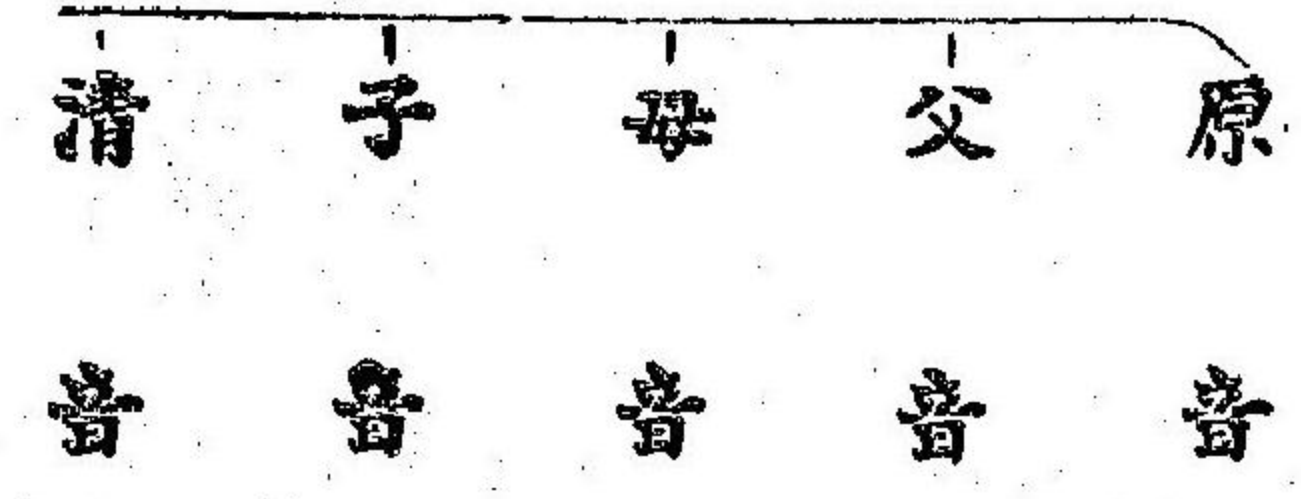
通用	數音	八音	三音	二音			一音	音數 平假名片假名	註 例
く		く				と	ゝ		
々			云	ノ	片	片	一		
めてたしく (目出度目出度) 等	かへすく (返返) ゆめく (努努)	かたく (方方) なりく (折折)	まゐらせ まゐらふ (詣らせ候)	とく (とく)	あて (爲て) 雨あて (等)	とも (雖とも) 共 (等)	こと (事)	あゝ (嗚呼) ちゝ (父) はゝ (母) 等	



の類是れなり

澤音の十三種

我國の澤音を分て十三種と爲す原音、父音、母音、子音、清音、濁音、半濁音、變音、物音、省音、約音、延音、音便是れなり



澤音の十三種

原音とい我が國音の成り出つる基原の澤よて其數はア、イ、ウ、エ、オ、ク、ス、ツ、マ、フ、ム、ルの十二音是れなり



國語學文典

あ い う え お

(縦ノ五音)

く す つ め お む る

(横ノ七音)

縦の行なる五音は其聲明明なるゆゑ既成音と云ひ横の段なる七音は其聲隱微なるゆゑ未成音と云ふ

父音

父音とは母音と配合えて子音を生ずる聲音を云ふ其數はイ、ウ、ク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ルの九音なり

五十連音圖

此圖は母音子音の相通するものを類別して之れを縦横に連ね我國人固有の聲音を表出して其音韻の性格を知り萬變に應ずるも各々其格に従ひて混亂錯雜するとなからしむ 此圖の排列は中古印度自り來りたる五十音圖を本とし吉備真備氏遣唐留學中より作る所と云ふ 縦行の五字を音とし横段の十字を韻と爲す

時	(韻)	段	段	段	段	段	段	段	段	性質
未來	阿	段	伊	段	江	段	來	段	來	
過去	阿	段	伊	段	江	段	來	段	來	
現在	阿	段	伊	段	江	段	來	段	來	
過去	阿	段	伊	段	江	段	來	段	來	
未來	阿	段	伊	段	江	段	來	段	來	

國語學文典

	阿行	加行	佐行	多行	茶行	波行	末行	也行	良行	和行
	(ア)	(カ)	(サ)	(タ)	(ナ)	(ハ)	(マ)	(ヤ)	(ラ)	(ワ)
開	(イ)	(キ)	(シ)	(チ)	(ニ)	(ヒ)	(ミ)	(リ)	(ヰ)	(ヱ)
承	(ウ)	(ク)	(ス)	(ツ)	(ヌ)	(フ)	(ム)	(ル)	(ヱ)	(ヲ)
轉	(エ)	(ケ)	(セ)	(テ)	(ネ)	(ヘ)	(メ)	(レ)	(ヱ)	(ヲ)
縱	(オ)	(コ)	(ソ)	(ト)	(ノ)	(ホ)	(モ)	(ヨ)	(ヲ)	(ヲ)
合	喉正音	喉牙音	舌牙音	舌頭音	舌上音	唇輕音	唇重音	喉淺音	舌卷音	喉深音

(ア)(イ)等は母音の標目

國語學文典

母音

「ク」「ス」等は母音と相重なる七原音の標目

(ヤ)(ワ)等は母音の相重て生ずる子音の標目

は省音の標目と知るべし

母音とは五十音中阿行なるア、イ、ウ、エ、オの五字にて父音と配合し加行以下の子音を生み出つる聲を云ふ此聲は喉自り發して清朗單一なるゆゑ最初 あ……………ア

い……………イ  
う……………ウ  
え……………エ  
お……………オ  
………は其音を何處まで延長しても本音の外に出づること無し故に又單音とも名く

國語學文典

此聲の變化は因りて加行以下四十五箇の子音を生ずるなり

(あ) 此音は喉自り出る聲にて(カサタナハマヤラフ)の九つの音は永く引けは皆あるなる故に親音といふ又(イウエオ)の聲の始めなり

(い) 此音は口を横に開きて出す聲にて(キシチニヒミトリ井)の九つの音の親なり

(う) 此音は口を窄めて出す聲にて(クスツヌフムエル子)の九つの親なり

(は) 此音は口を些か開きて出す聲にて(ケセテテヘメ氏レエ)の九つの親なり

(れ) 此音は喉自り出る聲を一とたび口の内に籠らせて呼ぶものにて(コソトノホモヨロフ)の九つの親なり 以上阿行の五音は

國語學文典

子音

唇音の正面より出づ故に喉正音と云ふ

子音とは加行以下の四十五字にて二箇の母音の相重りて成るものと母音原音の相重りて成るものと因り其聲單純ならず始め

- か.....ア
  - き.....イ
  - く.....ウ
  - け.....エ
  - こ.....オ
- の如く延長して唱れば遂に

母音と歸するゆゑ子音と稱し又複音とも云ふなり

母音と相重りて子音を生ずる所の父音即ち七つの原音は(クスツヌ

國語學文典

フムル)なり此七の原音の母音と結合して成る所の順序は左の如し

先づ「ク」と母音と重りて(かきくけこ)の加行五音成り

「ス」と母音と重りて(さしすせそ)の左行五音成り

「ツ」と母音と重りて(たちつてと)の多行五音成り

「ヌ」と母音と重りて(なにぬねの)の奈行五音成り

「フ」と母音と重りて(はひふへほ)の波行五音成り

「ム」と母音と重りて(まみむめも)の末行五音成り

「ル」と母音と重りて(らりるれろ)の良行五音成るなり

切て其結合する形ちを擧れば

父母の兩音相合て加行の子音を生ずる關係

國語學文典

父音	母音	子音	原音	合音	生音
	あ	か			
	い	き			
	う	く			
	え	け			
	お	こ			
加行結合表					

(か) 此音は齒と觸れて出づる聲の始めなり此聲は「ク」の父音と(あ)の母音と重りて生ずるものなり

(き) 此音は口を横に開らき齒と觸れ緊めて出す聲なり此聲は「ク」の父音と(い)の母音と重りて生ずるものなり

(く) 此音は口を窄ぼり齒と觸れ緊めて出す聲なり此聲は「ク」の父音と(う)の母音と重りて生ずるものなり

(け) 此音は齒と觸れて出る聲を口を些か下の方を開きて出すものなり此聲は「ク」の父音と(え)の母音と重りて生ずるものなり

(こ) 此音は齒と觸れて出る聲を と度ひ口より籠らせて出すものなり此聲はクの父音と(れ)の母音と重りて生ずるものなり 以上加行の五音は喉牙と觸れて出づ故に喉牙音と云ふ

父母の両音相合て佐行の子音を生ずる關係

父音	母音	子音	原音	合音	生音
す	あ	さ	あ	佐行結合表	
す	い	し	い		
す	う	す	う		
す	え	せ	え		
す	お	そ	お		

(さ) 此音は齒と觸れ軽く舌も觸れて出る聲の始めなり此聲は「ス」の父音と(あ)の母音と重りて生ずるものなり  
 (し) 此音は齒と觸れ軽く舌も觸れて出る聲を口を横に開きて出すものなり此聲は「ス」の父音と(い)の母音と重りて生ずるものなり

(ず) 此音は齒と觸れ軽く舌も觸れて出る聲を口を窄はめて出すものなり此聲は「ス」の父音と(う)の母音と重りて生ずるものなり  
 (せ) 此音は齒と觸れ軽く舌も觸れて出る聲を口を些か下を開きて云ふものなり此聲は「ス」の父音と(お)の母音と重りて生ずるものなり  
 (そ) 此音は齒と觸れ軽く舌も觸れて出る聲を一と度ひ口の内に籠らせて出すものなり此聲は「ス」の父音と(れ)の母音と重りて生ずるものなり 以上佐行の五音は舌牙と觸れて出づ故に舌牙音と云ふ  
 父母の両音相合て多行の子音を生ずる關係

父音	母音	子音	原音	合音	生音
つ	あ	た	あ	多行結合表	
つ	い	ち	い		
つ	う	つ	う		
つ	え	て	え		
つ	お	と	お		

國語學文典

- (た) 此音は舌の先を動かして出す聲の始なり此聲は「ツ」の父音と(あ)の母音と重りて生ずるものなり
  - (ち) 此音は舌の先を動かして口を横に開きて出す聲なり此聲は「ツ」の父音と(い)の母音と重りて生ずるものなり
  - (つ) 此音は舌の先を動かして口を窄めて出す聲なり此聲は「ツ」の父音と(う)の母音と重りて生ずるものなり
  - (て) 此音は舌の先を動かして口を下に開きて出す聲なり此聲は「ツ」の父音と(え)の母音と重りて生ずるものなり
  - (と) 此音は舌の先を動かして口を籠らせて出す聲なり此聲は「ツ」の父音と(お)の母音と重りて生ずるものなり
- 以上多行の五音は舌頭を觸れて出づ故に舌頭音と云ふ

父母の兩音相合て奈行の子音を生ずる關係

父音	母音	子音	原音	合音	生音
	あ	ナ			
	い	ニ			
ぬ	う	ヌ			
	え	ネ			
	お	ノ			
奈行結合表					

- (な) 此音は舌の先を廻して出す聲の始なり此聲は「ヌ」の父音と(あ)の母音と重りて生ずるものなり
- (に) 此音は舌の先を廻して口を横に開きて出す聲なり此聲は「ヌ」の父音と(い)の母音と重りて生ずるものなり
- (ぬ) 此音は舌の先を廻して口を窄めて出す聲なり此聲は「ヌ」の父音と(う)の母音と重りて生ずるものなり
- (ね) 此音は舌の先を廻して口を下に開きて出す聲なり此聲は「ヌ」の父音と(え)の母音と重りて生ずるものなり
- (の) 此音は舌の先を廻して口を籠らせて出す聲なり此聲は「ヌ」の父音と(お)の母音と重りて生ずるものなり

國語學文典

(の) 此音は舌の先を廻し口を籠らせて云ふ聲なり此聲は「ヌ」の父音と「ハ」の母音と重りて生ずるものなり  
 以上「ナ」の五音は舌の上より出づ故に舌上音と云ふ

父母の兩音相合て波行の子音を生ずる關係

父音	母音	子音	原音	合音	生音
	ハ	ノ	ハ	ノ	
	ヒ	ニ	ヒ	ニ	
	フ	ヒ	フ	ヒ	
	ヘ	フ	ヘ	フ	
	ホ	ヘ	ホ	ヘ	

波行結合表

(ハ) 此音は軽く唇を動かして出す聲の始なり此聲は「フ」の父音と「ハ」の母音と重りて生ずるものなり  
 (ヒ) 此音は軽く唇を動かして口を横に開き出す聲なり此聲は「フ」の父音と「ヒ」の母音と重りて生ずるものなり

國語學文典

(ハ) 此音は軽く唇を動かして口を窄めて出す聲なり此聲は「フ」の父音と「ハ」の母音と重りて生ずるものなり  
 (ヘ) 此音は軽く唇を動かして口を下に開き出す聲なり此聲は「フ」の父音と「ヘ」の母音と重りて生ずるものなり  
 (ホ) 此音は軽く唇を動かして口を籠らせて云ふ聲なり此聲は「フ」の父音と「ホ」の母音と重りて生ずるものなり  
 以上波行の五音は軽く唇を動かして出づ故に舌上音と云ふ

父母の兩音相合て末行の子音を生ずる關係

父音	母音	子音	原音	合音	生音
	ハ	ノ	ハ	ノ	
	ヒ	ニ	ヒ	ニ	
	フ	ヒ	フ	ヒ	
	ヘ	フ	ヘ	フ	
	ホ	ヘ	ホ	ヘ	

末行結合表



- (ま) 此音は重く唇を動かして出す聲の始なり此聲は「ム」の父音と(あ)の母音と重りて生ずるものなり
  - (み) 此音は重く唇を動かして口を横に開きて出す聲なり此聲は「ム」の父音と(い)の母音と重りて生ずるものなり
  - (む) 此音は重く唇を動かして口を窄めて出す聲なり此聲は「ム」の父音と(う)の母音の重りて生ずるものなり
  - (め) 此音は重く唇を動かして口を下に開きて出す聲なり此聲は「ム」の父音と(え)の母音と重りて生ずるものなり
  - (も) 此音は重く唇を動かして口を籠らせて出す聲なり此聲は「ム」の父音と(お)の母音と重りて生ずるものなり
- 以上末行の五音は重く唇を觸れて出づ故に重唇音と云ふ

父母の兩音相合て良行の子音を生ずる關係

- (ら) 此音は舌を働かし出して出す聲の始なり此聲は「ル」の父音と(あ)の母音と重りて生ずるものなり
- (り) 此音は舌を働かし口を横に開きて出す聲なり此聲は「ル」の父音と(い)の母音と重りて生ずるものなり
- (る) 此音は舌を働かし口を窄めて出す聲なり此聲は「ル」の父音と(う)の母音と重りて生ずるものなり
- (れ) 此音は舌を働かし口を下に開きて出す聲なり此聲は「ル」の

父音	母音	子音	原音	合音	生音
	あ	ら			
	い	り			
	う	る			
	え	れ			
	お	ろ			
良行結合表					

國語學文典

父音と(ロ)の母音と重りて生ずるものなり

(ろ) 此音は舌を働かし口を籠らせて出す聲なり此聲は「ル」の父

音と(た)の母音と重りて生ずるものなり 以上良行の五音は舌

を巻き働かし出つ故に舌音と云ふ

母音の相重りて生ずる所の子音は左の如し

「イ」の母音と五個の母音と重りて (やいゆえよ) の也行

五音成り

「ウ」の母音と五個の母音と重りて (わゐうゑを) の和行

五音成るなり

初て其結合する形ちと擧れば

兩音相合て也行の子音を生ずる關係

父音	母音	子音	原音	合音	生音
	あ	や			
	い	し			
	う	す			
	え	は			
	お	ほ			
		こ			
也行結合表					

(や) 此音は「イ」の父音と(あ)の母音と重りて生ずる聲なり此聲を發

する時は口角を側へ引き下唇を窄めあ音を出す如くすべし

(い) 此音は「イ」の父音と(い)の母音と重りて生ずる聲なり此聲を發

する時は口角を側へ引き下唇を窄めい音を出す如くすべし

(う) 此音は「イ」の父音と(う)の母音と重りて生ずる聲なり此聲を發

する時は口角を側へ引き下唇を窄めう音を出す如くすべし

(え) 此音は「イ」の父音と(え)の母音と重りて生ずる聲なり此聲を發

する時は口角を側へ引き下唇を窄めえ音を出す如くすべし

國語學文典

(よ) 此音は「イ」の父音と「レ」の母音と重りて生ずる聲なり此聲を發する時は口角を側へ引き下唇を窄めた音を出す如くすべし  
 以上也行の五音は深く喉自ら發す故は喉淺音と云ふ  
 兩音相合て和行の子音を生ずる關係

父音	母音	子音	原音	合音	生音
			和行結合表		

(わ) 此音は「ウ」の父音と「あ」の母音と重りて生ずる聲なり此聲を發する時は下唇を上前齒に向け窄めて息氣を下唇を受けあ音を出す如くすべし  
 (め) 此音は「ウ」の父音と「い」の母音と重りて生ずる聲なり此聲を發

國語學文典

する時は下唇を上前齒に向け窄めて息氣を下唇を受けい音を出す如くすべし  
 (う) 此音は「ウ」の父音と「す」の母音と重りて生ずる聲なり此聲を發する時は下唇を上前齒に向け窄めて息氣を下唇を受けす音を出す如くすべし  
 (ゑ) 此音は「ウ」の父音と「レ」の母音と重りて生ずる聲なり此聲を發する時は下唇を上前齒に向け窄めて息氣を下唇を受けレ音を出す如くすべし  
 (を) 此音は「ウ」の父音と「れ」の母音と重りて生ずる聲なり此聲を發する時は下唇を上前齒に向け窄めて息氣を下唇を受けれ音を出す如くすべし  
 以上和行の五音は深く喉自ら發す故は喉淺音と云ふ  
 此也行和行の十音を亦た二重母音とも稱するなり

右門行の五母音と加行以下の四十五子音とを清音とす

濁音

濁音とは聲音の濁りて鈍きものを云ふ其數は加佐多波の四行合せて二十音と爲す

加行	佐行	多行	波行
ガ	ザ	ダ	バ
ギ	ジ	ヂ	ビ
グ	ズ	ヅ	ブ
ゲ	ゼ	デ	ベ
ゴ	ゾ	ド	ボ

其例を擧れば

加行よては……い(が) (栗判)

ひ(が)し (東)

國語學文典

う(な)ぎ (鱧)  
や(な)む(ぐ)ら (八重葎)

う(な)ひ(す) (鱒)  
こ(が)げ (蛸場)

か(げ) (鰓)  
み(さ)ご (鴨の類)

に(ご)り (濁)  
あ(か)ざ (菘)

に(ご) (虹)  
ひ(つ) (羊)

も(ず) (鴨)  
ね(ず)み (鼠)

か(ぜ) (風)  
は(ぜ) (沙魚)

み(ぞ) (鱒)  
ほ(ぞ) (鱒の類)

ふ(だ) (札)  
く(だ) (管)

あ(ぢ) (鱒)  
ふ(ぢ) (鱒)

う(づ)ら (鵜)  
か(は)つ (蛙)

多行よては……

佐行よては……

國語學文典

國語學文典

波行よては………そば (蕎麥)  
 なでしこ (蓼) たて (莖)  
 みどり (綠) をどり (踊) の類

とび (鴉) へび (蛇)  
 あぶ (蛇) かぶら (蕪)  
 な (鍋) かう (首)  
 ねぼろ (朧) まぼろし (幻) の類なり

半濁音

半濁音とは両唇を撥彈きて生ずる一種の聲音なり此音は素と齊の濁れるものよあらず故よ又次清音とも云ふ其數は波行の五音と爲す

國語學文典

波行

バ  
 ビ  
 プ  
 ペ  
 ポ

其例を擧れば

もつ (ば) (專) ふん (ば) (憤發)  
 まつ (び) (眞平) そん (び) (尊卑)  
 ねん (ぶ) (年譜) なん (ぶ) (南風)  
 ひつ (ぼ) (筆法) の類なり

變音

五十音の外更ニ鼻自り出て穢る聲あり之れを變音又は鼻音と云ふ此音の標目を記すニ平假名ニは(ん)字を用ゐる片假名ニは(ン)字を

國語學文典

用う物て五十音は口の正音なるに因り口を閉づれば一音も發すること能はざるを獨り此音のみは全く口の正音にあらざるを以て口を閉ぢて呼ぶも猶ほ其聲を發し得るなり古昔はむ字を以て此音の用を充て或はにいの等も呼ひしことあり例へば

らん (蘭) を らに

めんぼく (面目) を めいぼく

こんそ (近衛) を このゑと稱るか如し然れども後ちよ

此ん字出でい専ら鼻音の符號となれば復たむと同一に見るへか

らず且つむは長聲短聲は呼ぶも自在なれどもんは長聲は呼ぶへ

くを短て聲は呼ぶへからずむは句頭を置くべく (むし虫むし

の如) んは句頭を置くべからざるを (んし虫んしる席ん) 以てなり

以上母子音五十濁音二十半濁音五變音一合て七十六音とす天下

の廣き言語の多き此れを以て其音を寫すに記すべからざるものあることなし學者克く玩索して輕輕に看過することなけれ

拗音

拗音とは正音の變じて少し拗みし音にてイヤ、ウワ、キヤ、クワなどの二音を一音の如く呼ひなすものを云ふ五十音は正音にて即ち直音なり此直音の下の右は第二韻なるイキシチニヒミトリ井を並べしもの父音となり其下は二重母音の也行ヤイユ仄ヨを置きしもの母音となり左に第三韻なるウクスツヌフムユルツを並べしもの父音となり其下に二重母音の和行ワ井于エヲを置きしもの母音となりて拗音を生ずるものなれば二重母音の伊横段字横段と配合して生ずる聲を知るべし又此右方なるイヤ、イト、イユ等は拗の開音にて軽く左方なるウワ、ウ井、ウ于等は

國語學文典



ラ	ア
リ	イ
ル	ウ
レ	エ
ロ	オ

(阿) (伊) (宇) (江) (於)

其例を擧げれば  
 ア 山縣 今朝  
 イ 明石 十市  
 ウ 鴨海 豊浦  
 エ 未だ証例を得ず  
 オ 背面 笠置

益荒雄 乾飯 尾上  
 陸奥の類なり

河合の類  
 伊達の類  
 河内の類

(良)

以上阿行

ま●うと達(賓客)  
 國の遠か●ば(葉萬)  
 惜みみん(新古)

下通を走●せ(古事記)

身よかへていざさ●ば秋を  
 獨のみ夜も明けやらぬ秋の

(利) (流)

ル・リ

夢のさ●ばまだ覺ぬ君もありけり(拾玉)の類  
 行野 綠野 寄據 右(みぎ)の類  
 あ●べき限り(榮花) 物語  
 渡り給ふへか●なり(馬邊)の類  
 かへ●さの道

心うく

(禮)

レ

(呂)

添へし面影ぞ(拾遺)の類  
 心地 宜

以上良行

倒

蕩の類なり

遠け●ば

(葉萬) 此は誰が



國語學文典

(鐵)(之)(知)(仁)(比)(美)(以)

レ ● ミ ● ヒ ● ニ ● チ ● シ ● キ ●

以上伊横段

約音

柳河	山鹿	口説	土師	隼人	弓袋
濃紫	足助	蓮	隨意	飯粒	硯

(以は阿行のし伊)  
と參看すべし

引刺	鐵(踏足)	拵取	掃部の類	誓言の類	富山
----	-------	----	------	------	----

睡噴の類	山の麓の類	内合人の類	白髮の類なり
------	-------	-------	--------

五十音より約音と云ふもの有り約音とは二音を約めて一音に歸せしむるものにて又は反切とも云ふ其反へし約むる法は第一音を父位とし第二音を母位とし其歸する所の音は即ち所生の子

國語學文典

音なり約音の法則を分て四つと爲す第一。父音母音の兩位とも同音同位なるときは直ち其音に歸するなり之を坐切と名く第二。父母兩位五十音の同行中にある時は母位の音に歸し第三。父母兩音共同段にあるときは父位の音に歸し第四。父母の音行と段とを異にする時は父位同行よみて母位と同段に當るものに歸するなり

第一法則 父母の兩位とも同音同位なるもの例  
○ かるが故まハ元トか かるが故まノ(かか)ノ約りてか音トナリ  
シモノナリ

父位

か 母位 き く け こ

歸音即チ所生ノ子

國語學文典

○**祠**(音字)ハ似並反ノ(シト)ノ約リテシ音トナリシ者ナリ

父位

カ　シ母位　サ　セ　ソ

歸音即チ所生ノ子

○**孤**(音字)ハ古乎反ノ(コ)ノ約リテ音トナリシ者ナリ

父位

カ　キ　ク　ケ　コ母位　の類なり

歸音即チ所生ノ子

○もて(以)ちて(ノ)約リテ音トナリシ者ナリ

タ　チ父位　ツ　テ母位　ト

第二法則 父母の兩位とも同音中ニ在るものの例

國語學文典

○取らる(ハ)とる(ラ)る(ル)被取(ノ)る(ル)ノ約リテ音トナル者

ラ母位　リ　ル父位　レ　ル

○**竿**(音字)ハ古寒反ノ(コ)ノ約リテ音トナル者

カ母位　キ　ク　ケ　コ父位　の類なり

第三法則 父母兩音のとも同段ニ在るものの例

○**ねぢ**ハねぢ祖父ノ(ネ)ノ約リテ音トナル者

ア　イ　ウ　エ  
ハ　ヒ　フ　ヘ  
ネ父位  
ネ母位

○**碑**(音字)ハ彼鳥反ノ(ヒ)ノ約リテ音トナル者

○<sup>レ</sup>仁<sup>ハ</sup>音<sup>字</sup>而<sup>隣</sup>反<sup>ノ</sup>下<sup>リ</sup>ノ約<sup>リ</sup>テト<sup>音</sup>トナル者

は 母位  
ひ 父位  
わ 母位  
ふ 母位  
を 母位  
さ 母位  
せ 母位  
そ 母位  
ら 母位  
れ 母位  
ろ 母位

第四法則 父母の兩音と段とを異にするもの例

○あふ<sup>み</sup>いあは<sup>う</sup>み<sup>浪</sup>海<sup>ノ</sup>は<sup>う</sup>ノ約<sup>リ</sup>テふ<sup>音</sup>トナル者

あ 母位  
い 母位  
は 父位  
ひ 母位  
ふ 母位  
へ 母位  
ほ 母位

○に<sup>ま</sup>こ<sup>り</sup>い<sup>に</sup>ま<sup>さ</sup>たり<sup>錦</sup>織<sup>ノ</sup>ま<sup>た</sup>ノ約<sup>リ</sup>テこ<sup>音</sup>トナル者

○あそ<sup>み</sup>いあさ<sup>た</sup>み<sup>朝</sup>臣<sup>ノ</sup>さ<sup>た</sup>ノ約<sup>リ</sup>テそ<sup>音</sup>トナル者

あ 母位  
い 母位  
う 母位  
は 母位  
そ 母位  
た 母位  
か 父位  
さ 父位  
し 父位  
す 父位  
せ 父位

○かか<sup>る</sup>い<sup>か</sup>く<sup>あ</sup>る<sup>如</sup>斯<sup>有</sup>ノく<sup>あ</sup>ノ約<sup>リ</sup>テか<sup>音</sup>トナル者

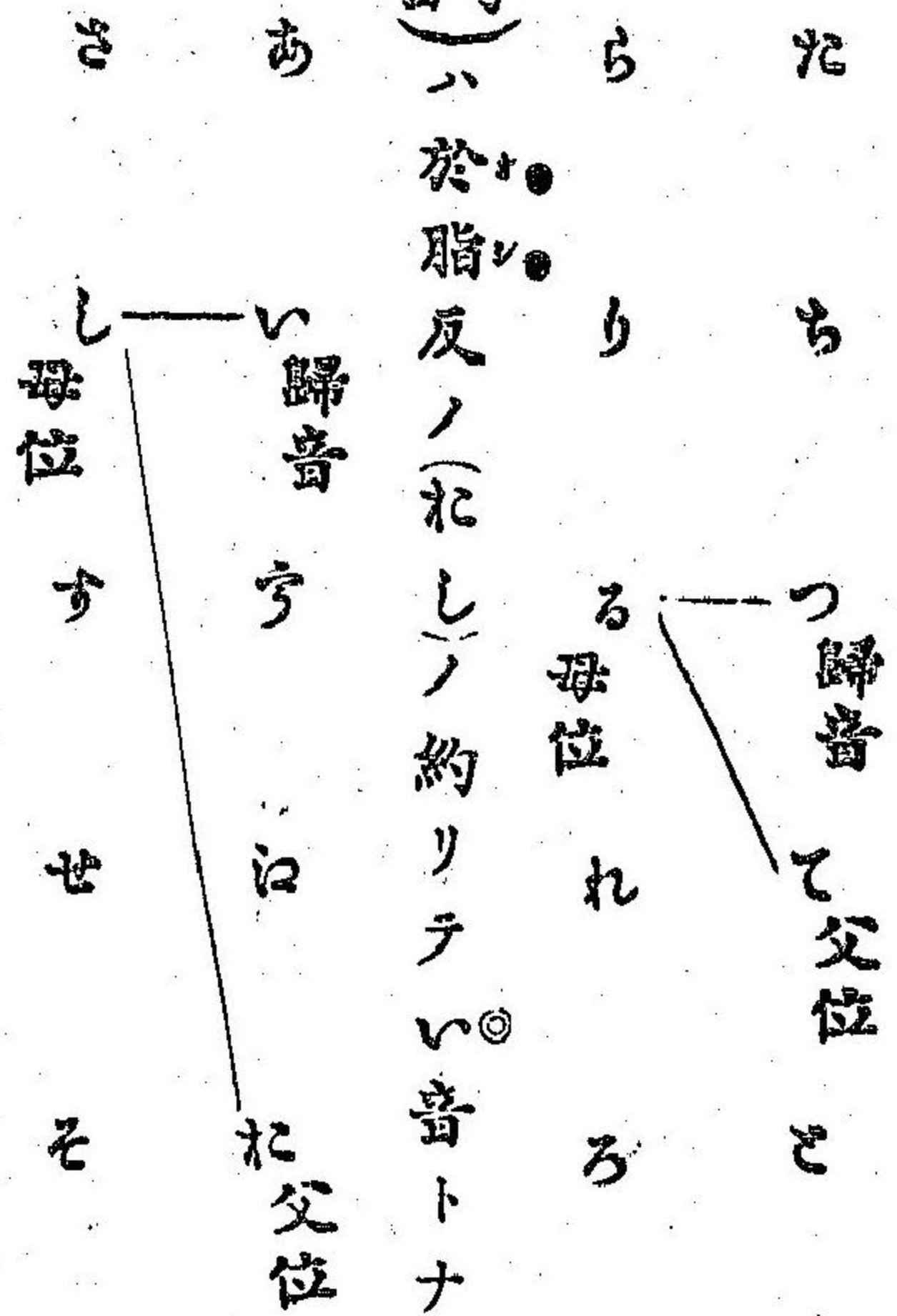
あ 母位  
い 母位  
う 母位  
は 母位  
か 父位  
さ 父位  
し 父位  
す 父位  
せ 父位

○あわ<sup>つ</sup>い<sup>あ</sup>わ<sup>て</sup>る<sup>周</sup>率<sup>ノ</sup>て<sup>る</sup>ノ約<sup>リ</sup>テつ<sup>音</sup>トナル者

國語學文典

○伊<sup>イ</sup>字<sup>音</sup>ハ於<sup>イ</sup>脂<sup>イ</sup>反<sup>イ</sup>ノ(れ<sup>イ</sup>し<sup>イ</sup>ノ約<sup>イ</sup>リテ<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>音<sup>イ</sup>トナル者

○胃<sup>イ</sup>字<sup>音</sup>ハ子<sup>イ</sup>貴<sup>イ</sup>反<sup>イ</sup>ノ(う<sup>イ</sup>き<sup>イ</sup>ノ約<sup>イ</sup>リテ<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>音<sup>イ</sup>トナル者



又三音以上を反切ニ約するものを二重反と云ふ其法左の  
ことし 字音の清濁は父位の發音ニ隨ふなり

わ か さ あ し 母位 父位 母位 父位 母位 父位 母位 父位

國語學文典

○源<sup>イ</sup>魚<sup>イ</sup>怨<sup>イ</sup>反<sup>イ</sup>ぎ<sup>イ</sup>よ<sup>イ</sup>ノ約<sup>イ</sup>ハことナリ(こ<sup>イ</sup>に<sup>イ</sup>ノ約<sup>イ</sup>ハけ<sup>イ</sup>トナル之レニ元  
ノん音ヲ添エレハ即チけんノ音トナルナリ

かきくけこ	母	一	切
たちつてと	子	父	
つトナルヲ 其マ、父字 トナスナリ			
かきくけこ	母	二	切
たちつてと	子	父	
ことナル之 ニこ <sup>イ</sup> う <sup>イ</sup> ノ 音ヲ合スレ ハ即チと <sup>イ</sup> う <sup>イ</sup> トナルナリ			

○東<sup>イ</sup>德<sup>イ</sup>紅<sup>イ</sup>反<sup>イ</sup>とく<sup>イ</sup>ノ約<sup>イ</sup>ハつ<sup>イ</sup>トナリ(つ<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>ノ約<sup>イ</sup>ハことナル之レニ元  
ノう音を添エレハ即チと<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>ノ音トナルナリ

一	切	ニ	切
---	---	---	---

	父 か 子 き け こ
こトナルヲ 其マ、父字 トナスナリ	
	母 あ 父 い け こ
けトナル之 ニ <del>い</del> んノん 音ヲ合レ ハ即チけん トナルナリ	

○<sup>レ</sup>啄<sup>ク</sup> 丁角反(てい)ノ約ハ<sup>チ</sup>トナリ(ち)カノ約ハ<sup>タ</sup>トナル之ニ元ノ<sup>ク</sup>音ヲ添エレバ即チ<sup>タ</sup>クノ音トナルナリ

	子 な 父 ち つ て
ちトナルヲ 其マ、父字 トナスナリ	
	母 か 子 き け こ
父トナル之 ニ <del>た</del> くノん 音ヲ合スレ ハ即チ <sup>た</sup> く トナルナリ	

○<sup>チ</sup>雅<sup>チ</sup> 直利反(ち)ノ約ハ<sup>ト</sup>トナリ(と)クノ約ハ<sup>ツ</sup>トナリ(つ)リノ約ハ<sup>チ</sup>音トナルナリ

	母 か 子 き け こ
父トナルヲ 其マ、父字 トナスナリ	
	母 あ 父 い け こ
子トナル之 ニ <del>わ</del> んノん 音ヲ合スレ ハ即チ <sup>わ</sup> ん トナルナリ	

○<sup>ハ</sup>波<sup>ハ</sup> 博未反(は)ノ約ハ<sup>ふ</sup>トナリ(ふ)クノ約ハ<sup>ふ</sup>トナリ(ふ)わノ約ハ<sup>は</sup>音トナルナリ

國語學文典

父 <sup>た</sup> 子 <sup>ち</sup> 父 <sup>た</sup> ち <sup>ち</sup> つ <sup>つ</sup> て <sup>て</sup> と <sup>と</sup> 子 <sup>子</sup>	一 切
父 <sup>た</sup> 子 <sup>ち</sup> つ <sup>つ</sup> て <sup>て</sup> と <sup>と</sup> 父 <sup>父</sup>	二 切
父 <sup>た</sup> 子 <sup>ち</sup> つ <sup>つ</sup> て <sup>て</sup> と <sup>と</sup> 父 <sup>父</sup>	三 切

父<sup>た</sup> 子<sup>ち</sup> つ<sup>つ</sup> て<sup>て</sup> と<sup>と</sup> 父<sup>父</sup>

○猪 陟魚反(ちよ)ノ約ハとナリ(とく)ノ約ハつトナリ(ちき)ノ約ハちトナル之ニよ音ヲ添ユレハ即チちよノ音トナルナリ

父 <sup>た</sup> 子 <sup>ち</sup> 父 <sup>た</sup> ち <sup>ち</sup> つ <sup>つ</sup> て <sup>て</sup> と <sup>と</sup> 子 <sup>子</sup>	一 切
父 <sup>た</sup> 子 <sup>ち</sup> つ <sup>つ</sup> て <sup>て</sup> と <sup>と</sup> 父 <sup>父</sup>	二 切
父 <sup>た</sup> 子 <sup>ち</sup> つ <sup>つ</sup> て <sup>て</sup> と <sup>と</sup> 父 <sup>父</sup>	三 切

父<sup>た</sup> 子<sup>ち</sup> つ<sup>つ</sup> て<sup>て</sup> と<sup>と</sup> 父<sup>父</sup>

の

類なり

國語學文典

又差(さ)やう(象)さやう(齋)さやう(録)りよく(等)の如く字音の假名三つの時は反切の第一音を其まゝすゑ置き第二音より約するなり例へは

○差 去陽反ノき音ハ置キテ(よ)や(ヲ)約スレハやノ音トナル之レニ上ノきト下ノウトヲ添ユレハさやうノ音トナルナリ

子 <sup>ち</sup> 母 <sup>母</sup>	一
子 <sup>ち</sup> 母 <sup>母</sup>	二
子 <sup>ち</sup> 母 <sup>母</sup>	三

○象 徐兩反ノ音ハ置テ(より)ヲ約スレハ以音トナル又(い)や(ヲ)約スレハや音トナル之ニ上ノ音ト下ノウ音トヲ添ユレハじ

國語學文典

やうノ音トナルナリ

一	<table border="1"> <tr> <td>ら</td> <td>や</td> </tr> <tr> <td>母り</td> <td>子</td> </tr> <tr> <td>る</td> <td>ゆ</td> </tr> <tr> <td>れ</td> <td>え</td> </tr> <tr> <td>ろ</td> <td>よ</td> </tr> <tr> <td></td> <td>父</td> </tr> </table>	ら	や	母り	子	る	ゆ	れ	え	ろ	よ		父	切
ら	や													
母り	子													
る	ゆ													
れ	え													
ろ	よ													
	父													
	<table border="1"> <tr> <td>ナ</td> <td>ト</td> </tr> <tr> <td>字</td> <td>父</td> </tr> <tr> <td>ト</td> <td>ス</td> </tr> </table>	ナ	ト	字	父	ト	ス							
ナ	ト													
字	父													
ト	ス													
二	<table border="1"> <tr> <td>母子</td> </tr> <tr> <td>—や</td> </tr> <tr> <td>—以</td> </tr> <tr> <td>父</td> </tr> <tr> <td>ゆ</td> </tr> <tr> <td>え</td> </tr> <tr> <td>よ</td> </tr> </table>	母子	—や	—以	父	ゆ	え	よ	切					
母子														
—や														
—以														
父														
ゆ														
え														
よ														
	<table border="1"> <tr> <td>ル</td> <td>や</td> </tr> <tr> <td>之</td> <td>ト</td> </tr> <tr> <td>ニ</td> <td>ナ</td> </tr> </table>	ル	や	之	ト	ニ	ナ							
ル	や													
之	ト													
ニ	ナ													

○音 巨崎反ノ音ハ置テ(よき)ヲ約スレハ以音トナル(以や)ヲ約スレハ以音トナル之ニ上ノ音ト下ノ音トヲ添ユレハ音トナルナリ

國語學文典

○縁 力玉反ノ音ハ置キテ(よく)ヲ約スレハ以音トナル(ゆき)ヲ約スレハ以音トナル(ゆえ)音トナル之ニ上ノ音ト下ノ音トヲ添ユレハ音トナルナリ

一	<table border="1"> <tr> <td>か</td> <td>子</td> </tr> <tr> <td>き</td> <td>く</td> </tr> <tr> <td>け</td> <td>こ</td> </tr> <tr> <td></td> <td>父</td> </tr> </table>	か	子	き	く	け	こ		父	切
か	子									
き	く									
け	こ									
	父									
	<table border="1"> <tr> <td>ト</td> <td>父</td> </tr> <tr> <td>ス</td> <td>音</td> </tr> </table>	ト	父	ス	音					
ト	父									
ス	音									
二	<table border="1"> <tr> <td>母子</td> </tr> <tr> <td>—や</td> </tr> <tr> <td>—以</td> </tr> <tr> <td>父</td> </tr> <tr> <td>ゆ</td> </tr> <tr> <td>え</td> </tr> <tr> <td>よ</td> </tr> </table>	母子	—や	—以	父	ゆ	え	よ	切	
母子										
—や										
—以										
父										
ゆ										
え										
よ										
	<table border="1"> <tr> <td>ル</td> <td>や</td> </tr> <tr> <td>之</td> <td>ト</td> </tr> <tr> <td>ニ</td> <td>ナ</td> </tr> </table>	ル	や	之	ト	ニ	ナ			
ル	や									
之	ト									
ニ	ナ									

かき母 くけこ や 子ゆえ 父よ	一 切
ト父之ナルゆ ス音ヲルト	
かき母 くけこ や 子ゆえ 父よ	二 切
ト父之ナルゆ ス音ヲルト	
や 子ゆえ 父よ 父 子 母	三 切
添くニ上ナよ ユヲリ下ルト	

○色<sup>ソコロ</sup> 所カ反ノ音ハ置テ(より)ヲ約スレハ以音トナル(以よ)ヲ約

スレハ以音トナル之ニ上ノ音ト下ノ音トヲ添ユレハ以音トナルナリ

か 子 ゆ え 父 ら 母 り る れ ろ	一 切
ト父之ナル ス音ヲルト	
や 父 え ゆ よ 子 母	二 切
添くニ上ナよ ユヲリ下ルト	

の類なり

延音

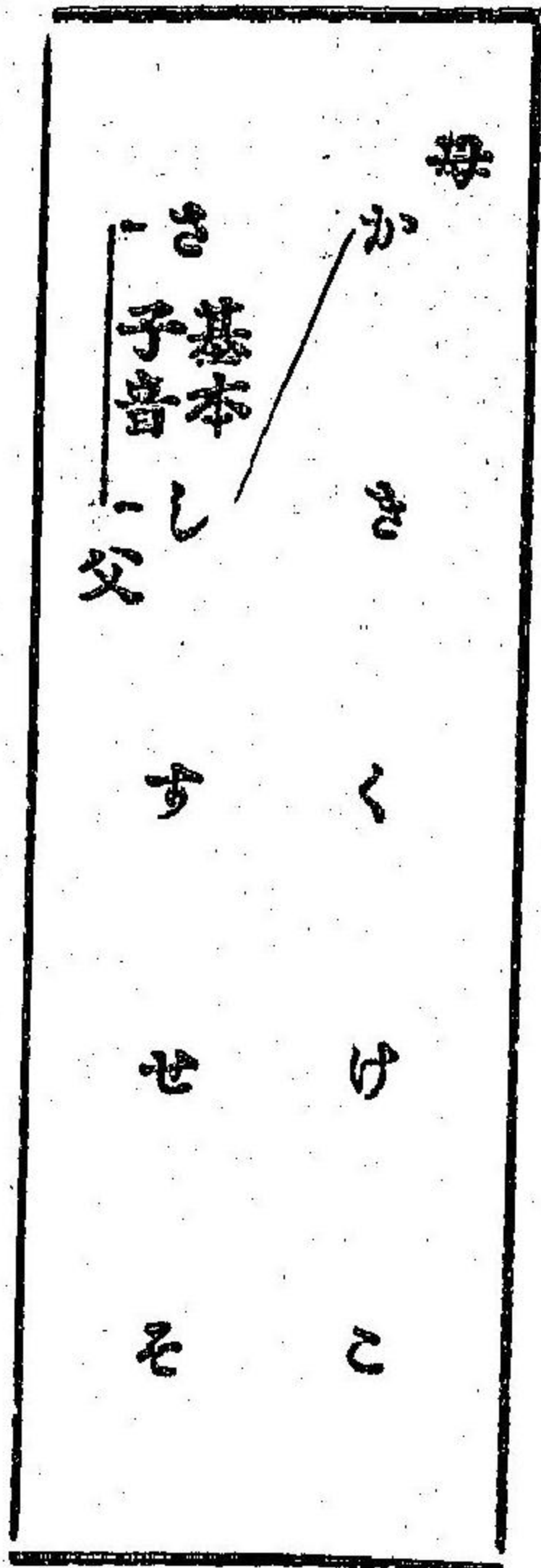
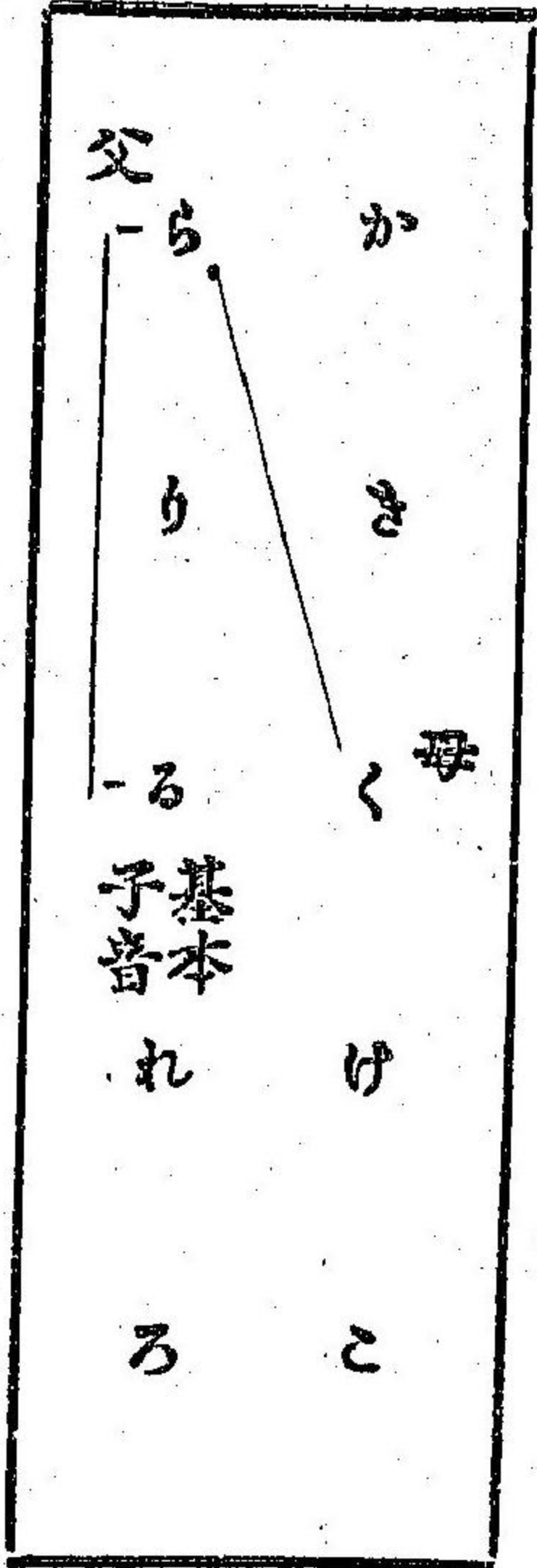
延音とは一音を延ばして二音と爲すものなり故に又伸音とも云ふ此延音の方法は約音の反對にて即ち自己の子音を基本として父音に渡り父音より又母音に渡り竟り父母の兩音をして其所用



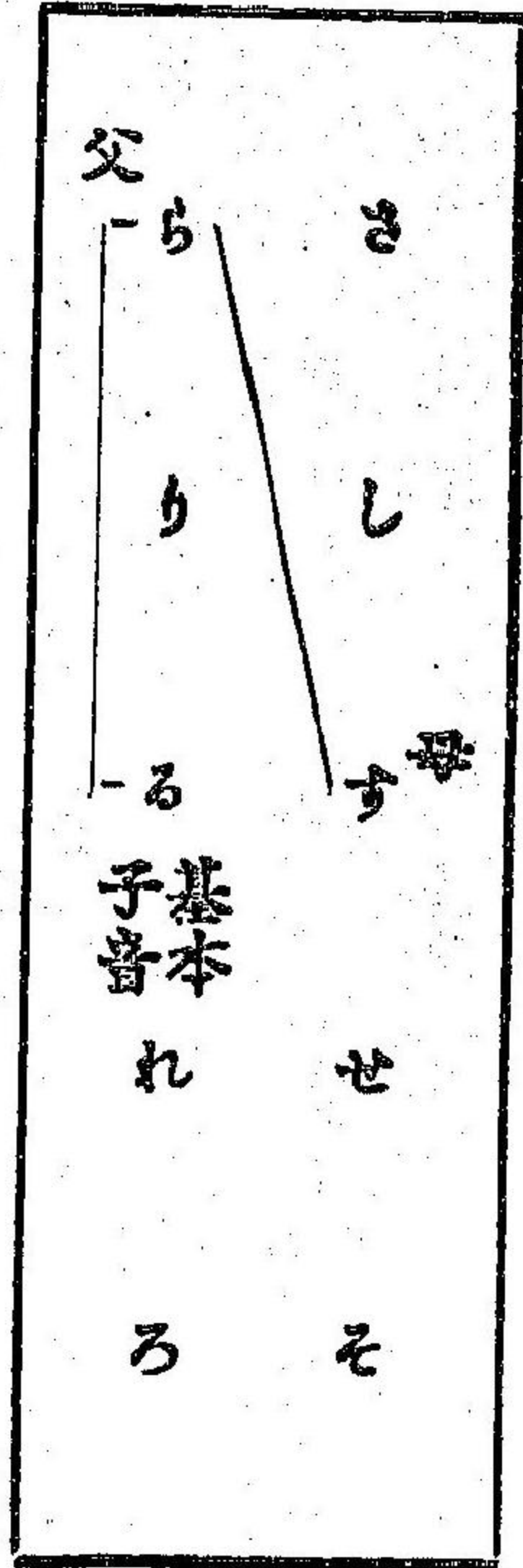


國語學文典

○然<sup>シ</sup>ノ<sup>カ</sup>カ<sup>ニ</sup>音<sup>ハ</sup>然<sup>カ</sup>音<sup>一</sup>ノ延音ナリ



○照<sup>ラ</sup>子<sup>ノ</sup>も<sup>チ</sup>音<sup>ニ</sup>ハ照<sup>ル</sup>音<sup>一</sup>ノ延音ナリ



以上の延音は大抵加、奈、波、末、良の五音に在るものと知るべし

加行に在る者

- さ<sup>カ</sup>ひ
  - ぎ<sup>グ</sup>り
  - く<sup>ケ</sup>く
  - さ<sup>カ</sup>ひ
  - ぎ<sup>グ</sup>り
  - く<sup>ケ</sup>く
- 歎<sup>シ</sup>きヲ歎<sup>カ</sup>かひト云フ  
過<sup>ス</sup>ぎを過<sup>グ</sup>ぐりト云フ  
惜<sup>シ</sup>くヲ惜<sup>ケ</sup>けくト云フ類

奈行に在る者

- め<sup>メ</sup>く
  - め<sup>メ</sup>なく
- 消<sup>メ</sup>ぬヲ消<sup>メ</sup>なくト云ヒ知<sup>ル</sup>ぬヲ知<sup>ル</sup>なくト云ヒ見<sup>ル</sup>  
ぬヲ見<sup>ル</sup>なくト云フ類

國語學文典

波行<sup>ハ</sup>ニ在<sup>ル</sup>者

○ふ<sup>ハ</sup> フ<sup>ハク</sup> はく<sup>ハク</sup> 曰<sup>ハク</sup>ふ<sup>ハク</sup> 曰<sup>ハク</sup>はく<sup>ハク</sup>ト云<sup>ハク</sup>ヒ<sup>ハク</sup>思<sup>ハク</sup>ふ<sup>ハク</sup> 思<sup>ハク</sup>はく<sup>ハク</sup>ト云<sup>ハク</sup>ヒ<sup>ハク</sup>宣<sup>ハク</sup>ふ<sup>ハク</sup> 宣<sup>ハク</sup>はく<sup>ハク</sup>ト云<sup>ハク</sup>フ<sup>ハク</sup>類

末行<sup>マ</sup>ニ在<sup>ル</sup>者

○む<sup>マ</sup> マ<sup>マク</sup> まく<sup>マク</sup> 告<sup>マク</sup>む<sup>マク</sup> 告<sup>マク</sup>まく<sup>マク</sup>ト云<sup>マク</sup>ヒ<sup>マク</sup>過<sup>マク</sup>む<sup>マク</sup> 過<sup>マク</sup>まく<sup>マク</sup>ト云<sup>マク</sup>ヒ<sup>マク</sup>見<sup>マク</sup>む<sup>マク</sup> 見<sup>マク</sup>まく<sup>マク</sup>ト云<sup>マク</sup>フ<sup>マク</sup>類

良行<sup>リ</sup>ニ在<sup>ル</sup>者

○る<sup>リ</sup> リ<sup>リク</sup> らく<sup>リク</sup> 告<sup>リク</sup>る<sup>リク</sup> 告<sup>リク</sup>らく<sup>リク</sup>ト云<sup>リク</sup>ヒ<sup>リク</sup>來<sup>リク</sup>る<sup>リク</sup> 來<sup>リク</sup>らく<sup>リク</sup>ト云<sup>リク</sup>ヒ<sup>リク</sup>荒<sup>リク</sup>る<sup>リク</sup> 荒<sup>リク</sup>らく<sup>リク</sup>ト云<sup>リク</sup>フ<sup>リク</sup>類是<sup>リク</sup>れ<sup>リク</sup>な<sup>リク</sup>り

通音

五十音中同行<sup>ゴ</sup>縦<sup>ジ</sup>の音<sup>ゴ</sup>は同行<sup>ゴ</sup>と相通<sup>ゴ</sup>し同段<sup>ゴ</sup>横<sup>ゴ</sup>の音<sup>ゴ</sup>は同段<sup>ゴ</sup>と相通<sup>ゴ</sup>ず  
之<sup>ゴ</sup>れ<sup>ゴ</sup>を縦<sup>ゴ</sup>横<sup>ゴ</sup>の通<sup>ゴ</sup>音<sup>ゴ</sup>の二<sup>ゴ</sup>種<sup>ゴ</sup>と云<sup>ゴ</sup>ふ

國語學文典

行通<sup>カ</sup>縦<sup>カ</sup>の通<sup>カ</sup>ひ

通音<sup>カ</sup>の二種

段通<sup>カ</sup>横<sup>カ</sup>の通<sup>カ</sup>ひ

行通<sup>カ</sup>とは同行<sup>カ</sup>音<sup>カ</sup>の上下<sup>カ</sup>は相通<sup>カ</sup>ふ者<sup>カ</sup>例<sup>カ</sup>ハは

さ<sup>カ</sup>かけ<sup>カ</sup>(木<sup>カ</sup>蔭<sup>カ</sup>)ノさ<sup>カ</sup>ヲこ<sup>カ</sup>かけ<sup>カ</sup>ト呼<sup>カ</sup>ヒ替<sup>カ</sup>ルカ如<sup>カ</sup>シ

加行
か
き
く
け
こ
是 <sup>カ</sup> レハ 第二 <sup>カ</sup> 音 <sup>カ</sup> ノ第二 <sup>カ</sup> 音 <sup>カ</sup> ニ通 <sup>カ</sup> ス ノモナリ

○阿行<sup>ア</sup>ニ在<sup>ル</sup>者<sup>ア</sup>ハあ<sup>ア</sup>も(母<sup>ア</sup>)ヲた<sup>ア</sup>もト云<sup>ア</sup>ヒ(子<sup>ア</sup>)ヲた<sup>ア</sup>もト云<sup>ア</sup>ヒ、(息<sup>ア</sup>)ヲた<sup>ア</sup>もト云<sup>ア</sup>ヒ、あ<sup>ア</sup>な(愛<sup>ア</sup>宕<sup>ア</sup>)ヲた<sup>ア</sup>もト云<sup>ア</sup>フ類

國語學文典

- 加行ニ在ル者ハさけつほ(酒壺)ヲさかつほト云ヒ、たけやふ竹藪ヲたかやふト云ヒ、いづこ(何所)ヲいづくト云フ類
- 佐行ニ在ル者ハかぜかみ(風上)ヲかざかみト云ヒ、いくとし(幾歲)ヲいくとせト云ヒ、せひら(背平)ヲそひらト云フ類
- 多行ニ在ル者ハてむけ(手向)ヲたむけト云ヒ、ちち(父)ヲててト云ヒ、てまくら(手枕)ヲたまくらト云フ類
- 奈行ニ在ル者ハふねひと(船人)ヲふなひとト云ヒ、のへ(野邊)ヲぬべト云ヒ、いねは(稻葉)ヲいなばト云フ類
- 波行ニ在ル者ハなへしろ(苗代)ヲなはしろト云ヒ、ひのほ(火焰)ヲほのほト云ヒ、うへあご(上領)ヲうはあごト云フ類
- 末行ニ在ル者ハつめは(くさ)介(彈)ヲつまはト云ヒ、あめやどり(雨宿)ヲあまやどりト云ヒ、まなか(最中)ヲまなかト云ヒ、みちづ(望)

國語學文典

- 月ヲもちづきト云ヒ、いぬ(夢)ヲゆめト云フ類
  - 也行ニ在ル者ハひえみづ(冷水)ヲひやみつト云ヒ、こえず(肥)ヲこやすト云ヒ、まゆび(眉)ヲまよびきト云フ類
  - 良行ニ在ル者ハあれ(荒野)ヲあら(の)ト云ヒ、あろゆき(白雪)ヲあらゆきト云ヒ、むれごり(群鳥)ヲむらごりト云ヒ、まるし(丸)ヲまるしト云フ類
  - 和行ニ在ル者ハこゑいろ(景色)ヲこわいろト云ヒ、ある(居)ヲをるト云ヒ、たわやか(嬋妍)ヲたなやかト云ヒ、うそ(虚言)ヲをそト云フ類なり
- 段通とは同段讀の左右に相通ふ者例へは  
はるあめ(春雨)ノあヲはるさめト呼ヒ替ルカ如シ



交え用ゐしより字音の呼法自から戦國語より音便と云ふもの起れり此音便を分て六種と爲す濁音の音便半濁音の音便急促して呼ぶ音便添へて呼ぶ音便省きて呼ぶ音便變えて呼ぶ音便是れなり

音便の六種

- 濁音の音便
- 半濁音の音便
- 急促して呼ぶ音便
- 添へて呼ぶ音便
- 省きて呼ぶ音便
- 變えて呼ぶ音便

濁音の音便とは

ひとひと(人人)      ヲ      ひとひとト呼ヒ

やまかは(山川)      ヲ      やまがはト呼ヒ

つりざな(釣竿)      ヲ      つりざなト呼ヒ

ひび(日日)      ヲ      ひびト呼ヒ

ゆけ(湯氣)      ヲ      ゆげト呼ヒ

きぬち(絹地)      ヲ      きぬちト呼ヒ

はなち(鼻血)      ヲ      はなちト呼フ類ナリ

半濁音の音便とは

ふんはつ(憤發)      ヲ      ふんはつト呼ヒ

なんふう(南風)      ヲ      なんふうト呼ヒ

せつひつ(拙筆)      ヲ      せつびつト呼ヒ

もはら(摩)      ヲ      もつはらト呼ヒ

ひきはる引張      ヲ      ひッばるト呼フ類ナリ

國語學文典

急促て呼ぶ音便とは

たふとし貴	ヲ	たッとしト呼ビ
もちて(以)	ヲ	もッてト呼ビ
たひて(追)	ヲ	たッてト呼ビ
やつこ(奴)	ヲ	やつこト呼ビ
ほりす(衆)	ヲ	ほッすト呼ビ
のりこる(則)	ヲ	のッこるト呼ビ
いかりて(怒)	ヲ	いかッてト呼ビ
またく(全)	ヲ	まッたくト呼ビ
もとも(最)	ヲ	もッともト呼ビ
うたへ(詠)	ヲ	うッたへト呼フ類ナリ

添へて呼ぶ音便とは

國語學文典

聲音編

ふふ(夫婦)	ヲ	ふうふト呼ビ
やか(八日)	ヲ	やうかト呼ビ
あか(詩歌)	ヲ	あいかト呼ビ
あト(四時)	ヲ	あいトト呼ビ
まな(真字)	ヲ	まんなト呼ビ
ずば(不者)	ヲ	ずんばト呼ビ
さトき(假床)	ヲ	さんトきト呼ビ
よよばう(女房)	ヲ	よようばうト呼フ類ナリ
省さて呼ぶ音便とは		
もんト(文字)	ヲ	もんトト呼ビ
ほんい(本意)	ヲ	ほんいト呼ビ
あんない(案内)	ヲ	あんないト呼ビ

ねんぶつ(念佛)	ヲ	ねぶつ	ト	呼フ	類ナリ
變えて呼ぶ音便とは					
つきたて(衝立)	ヲ	つ	い	た	て
さたま(増玉)	ヲ	さ	い	た	ま
ささはひ(幸福)	ヲ	さ	い	は	ひ
かさて(書)	ヲ	か	い	て	
ささき(石)	ヲ	さ	い		
あつし(熱)	ヲ	あ	い		
さむし(寒)	ヲ	さ	い		
なかし(長)	ヲ	な	い		
みトかし(短)	ヲ	み	ト	か	
もてなし(要應)	ヲ	も	て	な	

ちかし(近)	ヲ	ち	か	い	
いもた(妹)	ヲ	い	も	う	
かかふり(冠)	ヲ	か	う	ふ	
さくし(册子)	ヲ	さ	う	し	
かくし(格子)	ヲ	か	う	し	
さむく(寒)	ヲ	さ	む	う	
やうやく(漸)	ヲ	や	う	や	
ははき(簪)	ヲ	は	う	さ	
かはほり(蝙蝠)	ヲ	か	う	ほ	
ゐなかひと(田舎人)	ヲ	ゐ	な	か	
はふし法師	ヲ	は	う	し	
さうらふ(候)	ヲ	さ	う	ら	



國語學文典

つかへまつる(任奉)	ヲ	つかう <sup>◎</sup> まつるト呼ビ
なほし(直衣)	ヲ	なう <sup>◎</sup> しト呼ビ
たまはり(賜)	ヲ	たう <sup>◎</sup> はりト呼ビ
かみかさ(髮掻)	ヲ	かう <sup>◎</sup> かいト呼ビ
こみち(小路)	ヲ	こう <sup>◎</sup> ぢト呼ビ
かみつげ(上野)	ヲ	こう <sup>◎</sup> づけト呼ビ
かみべ(神戸)	ヲ	かう <sup>◎</sup> べト呼ビ
てみづ(手水)	ヲ	てう <sup>◎</sup> づト呼ビ
ひむか(日向)	ヲ	ひう <sup>◎</sup> がト呼ビ
まゐて(麥出)	ヲ	まう <sup>◎</sup> でト呼ビ
まます(申)	ヲ	まう <sup>◎</sup> すト呼ビ
をみな(女)	ヲ	をんな <sup>◎</sup> ト呼ビ

國語學文典

あきひと(商人)	ヲ	あきん <sup>◎</sup> とト呼ビ
かみなぎ(巫)	ヲ	かんなぎ <sup>◎</sup> ト呼ビ
わらわべ(童部)	ヲ	わらん <sup>◎</sup> べト呼ビ
ねごろ(懸)	ヲ	ねん <sup>◎</sup> ごろト呼ビ
にんわ(仁和)	ヲ	にん <sup>◎</sup> なト呼ビ
りんゑ(輪回)	ヲ	りん <sup>◎</sup> ねト呼ビ
てんわう(天皇)	ヲ	てんのう <sup>◎</sup> ト呼ビ
いんえん(因縁)	ヲ	いん <sup>◎</sup> ねん <sup>◎</sup> ト呼ビ
うんうん(云云)	ヲ	うん <sup>◎</sup> ぬん <sup>◎</sup> ト呼フ類ナリ

國語學文典

八

聲  
音  
編  
終

國語學文典

八

聲  
音  
編  
終

體  
言  
の  
調

言語編上

言葉の三大別

○我國人の言葉を大別すれば體言(すわり)用言(はたらき)助辭(てに)の三種と爲す

言葉の三大別

體言  
用言  
助辭

體言とは事物の體質名稱等を示す言葉よて凡て言ひ居え語尾の動かざるものを云ふ  
用言とは事物の所作形容等を表はす言葉よて凡て言ひ懸け語尾の活動變化するものを云ふ

國語文學典

助辭とは體言と用言との中間又は下方に添て語脈を連ね意味の活用を助くるものを云ふ

其例を擧れば

鹿	鳥	花	杖	山	體言
そ	の	は	を	よ	用言
鳴と	飛ぶ	咲と	持つ	登る	助辭

の類是れなり

以上の(山杖花)

國語文學典

鳥鹿(よては唯其名のみを表はしたるまでよて未だ言葉の運用なきゆゑ之れよ登る持つ咲く飛ぶ鳴く)の動詞を添へ始めて山杖花鳥鹿などの作用を見はずなり 然れども山登る杖持つ花咲く鳥飛ぶ鹿鳴くよては語脈を連ね所謂ゆる文章上の句調を爲すを得ず故よ又之れよにをはのその助辭を添へ體用兩言の脈絡を連ね句調を爲し意味を明かすことを得べし殊よ吾人の說話を爲し文章を属するよは此助辭を用ゐざれば其自他賓主を區別すること能はず文章說話の主客自他は凡べて此助辭よ由て判然と分るゝなり例へは

吾は木に書く(ト云へば吾が木ノ上ニ文)

吾は木を書く(ト云へハ吾が手ニテ樹木ノ上ニ文)

國語學文典

吾を本に書く(ト云ヘハ吾ノ像ヲ本ノ上ニ画クコトナリ)

吾の本に書く(ト云ヘハ吾ノ所持セル本ニ文字ナドヲ書クコトナリ) 此の如く吾本書くの三語

の間は置く所のはにをの等の用法は由りて其意味を種種に變化し來るがゆゑは觀語文章とも之を以て甚だ緊要なるものとする

ること知るべきなり 此にをはの稱は元としてノ字にノ字をノ字はノ字のノ字ぞやなんこそたりけるつれかな等ノ字其他種

(て) 累疊辭(サウシテ)

程經て又樓より上りて見給ふは電の烟雲の如く立ちければ(用言ト用言トノ間ニ在ル者) 在らせばやと思ふ人のみ失せ果てて在らせ

國語學文典

(に) 歸着辭(ココニ)

かしと思ふ人のみ(用言ト用言トノ間ニ在ル者) 箱根山の絶頂に湖水有り(體言ト體言トノ間ニ在ル者) 花の都に社定めつ(體言ト體言トノ間ニ在ル者)

(を) 使用辭(コレヲ)

船を浮べて眺むれば(体言ト用言トノ間ニ在ル者) 伴なへよさすが馴ぬる夜半の月身を隠すべき山の奥まで(体言ト用言トノ間ニ在ル者)

(は) 分別辭(コレハ)

人は食物を食ひ空氣を呼吸して生活す(体言トノ間ニ在ル者) 鶯の初音も未だ聞かぬ間は今年は梅の花咲きけり(体言ト体言トノ間ニ在ル者)

國語學文典

(の)

(舉止ガ辭)

夜漸深<sup>ツ</sup>けて四鄰只犬の吠<sup>フ</sup>ゆるを聞<sup>ク</sup> (体言ト用言トノ間ニ在ル者)

沖つ洲<sup>ノ</sup>は沙や滿つらん求食<sup>ス</sup>する蘆間<sup>ノ</sup>乃鶴<sup>ノ</sup>の立駭<sup>ル</sup>くめり (体言ト用言トノ間ニ在ル者)

(ぞ)

(指示辭)

縞<sup>ノ</sup>の羽織をぞ着<sup>タリ</sup>けり (助辭ト用言トノ間ニ在ル者)  
白雪の未<sup>レ</sup>だ降る里は知らねとも都<sup>ノ</sup>は今朝ぞ春めきまける (体言ト用言トノ間ニ在ル者)

(や)

(疑問辭)

汝<sup>ハ</sup>は馬に乘<sup>ル</sup>ることを好むや (用言ト下ニ在ル者)  
深山出でて夜半<sup>ニ</sup>や來<sup>ツ</sup>る郭公馬曉<sup>ニ</sup>かけて聲の聞ゆる (助辭ト用言トノ間ニ在ル者)

(なん)

(示諭辭)

神<sup>ノ</sup>本人<sup>ニ</sup>丸<sup>ニ</sup>なん歌の聖<sup>ニ</sup>なりける (體言ト用言トノ間ニ在ル者)  
其人姿<sup>ヨリ</sup>よりは心<sup>ニ</sup>なん優<sup>リ</sup>たりける (體言ト用言トノ間ニ在ル者)

(こそ)

(時異辭)

汝<sup>ガ</sup>が器量<sup>ハ</sup>は父<sup>コ</sup>こそ知りつれ (體言ト用言トノ間ニ在ル者)  
今は聲<sup>こそ</sup>聞かま欲<sup>し</sup>けれ (體言ト用言トノ間ニ在ル者)

(たり)

(治定辭)

後漢書<sup>ニ</sup>大和<sup>王</sup>は耶麻堆<sup>ニ</sup>居<sup>ス</sup>すと見えたり (用言ト下ニ在ル者)

鳴<sup>ル</sup>神の聲治<sup>め</sup>たり電<sup>ノ</sup>の光ばかりぞ夕立<sup>ノ</sup>の空 (用言ト體言トノ間ニ在ル者)

(ける)

(到來辭)

昔<sup>シ</sup>齊<sup>ノ</sup>の王燭<sup>ト</sup>といふ者國破<sup>レ</sup>れ君亡<sup>ヒ</sup>ける時 (用言ト體言トノ間ニ在ル者)

國語學文典

(つれ)

落着辭  
テシヨク  
ガマア

花と見るまで雪ぞ降りける (用言ノ下ニ在ル者)  
別れては昨日今日こそ隔てつれ千代志も經たる心地のみする (用言ト體言トノ間ニ在ル者)  
道のべよ清水流るゝ柳蔭暫ばしとてこそ立ち留りつれ (用言ノ下ニ在ル者)

(かな)

詠歎辭  
チヤナア

今朝鳴く鶯の珍らしきかな (用言ノ下ニ在ル者)  
神の靈驗を今日見つるかな (用言ノ下ニ在ル者)  
の類是

れなり

體言の七種

體言を分て七種と爲す名詞、代名詞、數詞、副詞、接續詞、感歎詞、冠詞、是れなり

體言の七種



名詞とは形ち有ると形ち無きとの差別なく事物一切の名を示す詞よて例へば日月人獸山川水石春秋朝夕東西日本支那武藏類朝徳川家康鎮西八郎親子妻姉車火鉢蒸氣船等の類是れなり  
代名詞とは事物の名を呼ぶ代り用ゐる詞よて例へば我汝君僕



拙者貴殿彼此其誰某等の類是れなり  
數詞とは事物の數を表はす詞にて例へは一つ二つ百千萬一線三  
品七草一個五盃十枚等の類是れなり

副詞とは事物の所作形状の如何を云ひ顯はす爲め用言に添ふ所  
の詞にて例へは頗る高し甚た卑し必ず爲す漸く暗る強く撃つ善  
く乘るの頗る甚た必ず漸く強く善く等の類是れなり

接續詞とは體用兩言の間へ添て單句の上下を接續する詞にて例  
へは又將或况且抑然らば然れど等の類是れなり

感歎詞とは事物に接し喜怒哀樂の感情の起る所の發音を示す詞  
にて例へは嗚呼あなたやかゝはほほ等の類是れなり

冠詞とは下文の語を引出さんが爲め先づ其上に置く所の詞にて  
全文全歌に關係ある者ゝあらずされども此詞を用るれば言葉に

くつろぎありて句調を助け無限の風韻を生ず所謂枕言葉是れ  
なり例へは足引の山の瀧つ瀧梓弓春來よけり刈萩の亂れたる世  
若草の妻も籠れりの足引梓弓刈萩若草等の類是れなり

名詞の十種

名詞を別ちて十種と爲す普通名詞、特稱名詞、示時名詞、示處名詞、示  
計名詞、解釋名詞、草稱名詞、遊言名詞、嘲罵名詞、用言名詞是れなり

名詞の十種

- 普通名詞
- 特稱名詞
- 示時名詞
- 示處名詞
- 示計名詞
- 解釋名詞

國語學文典

- 尊稱名詞
- 遜言名詞
- 嘲罵名詞
- 用言名詞

普通名詞とは普く通し用るの義にて何の世何の國に於ても其事  
物に對し一般普通な名け呼ぶものを云ふ即ち天地日月山川人馬  
草木松梅手足等の類是れなり

其例を擧れば

風カゼのそよぎ雨露ウツロの潤ひ雪ユキの清き花ハナのよそほひ

目は視耳ミミは聴ミコき口クチは味アジを知る天下テンカの人皆同し

高き屋ヤに登りて見れば烟ケムリり立つ氏ウヂの竈カマドは暖ヌクひよけり（号ノ符ナリ以下之ニ倣ヘ）の類

キシモノ普通名詞

國語學文典

時稱名詞とは或る事物のみ限りて特別に其名を稱するものを  
云ふ即ち日本支那英吉利富士山利根川源義家豐臣秀吉大久保彦  
左衛門正宗刀唐崎松波草提燈美濃紙薩摩芋等の類是れなり

其例を擧れば

楠正成ノノシタカは河内の國金剛山の城を籠りて北條氏八十萬の大軍  
を引き受けて屢々之れを打ち惱ましぬ

先づ佐々木ササキが先陣をよく合点アヒトみて見られ候へ頼朝ヨシトカ舎弟セテの蒲

冠者カザリも賜はらず籠臣カケの梶原カハシも賜はらぬ生妻ナマメを高綱タカツナも賜

はるよあらずや

武藏野ムサシノを雪の朝に見渡せば限りは富士の高嶺なりけりの類  
示時名詞とは其時の前後及現在を表はし示すものを云ふ即ち前  
きなる過去カクゴを示すは昔ムギ往昔ムギノミ昔者ムギノミ往年コトゴト頃者コトゴト當時トキノトキ等後ノチなる



國語學文典

坊の傍は大きな根木の有りければ入根木の僧正と言ひけるの類

示計名詞とは物の計度を言ひ願はずものを云ふ即ち長(ナカガサ) 大(オホ) 廣(ヒロ) 狭(セマ) 遠(トホ) 近(チカ) 縦(タ) 横

(イサ) (サ) (セマ) (トホ) (チカ) (タ)

方(タケ) 經(スジテ) 緯(スシコ) 高(タカサ) 深(フカサ) (コヨ) (タケ) (スジテ) (スシコ) (タカサ) (フカサ)

淺(アササ) 重(オモシ) 厚(アツサ) 延表(ナカサ) 廣表 (アササ) (オモシ) (アツサ) (ナカサ) (エンボウ) (ヒロサ)

(コウホウ) 周圍(ウシユ) 距離(リキヨ) 等の類是れなり

其例を舉れば

此海の中は堤の様にて廣さ一丈ばかりあるて直に渡りたる道なるあり深さは馬の太腹またつと聞く

國語學文典

頃は元暦元年正月廿日の事なれば峰の白雪深くして谷の氷も解けさりけり向ひの岡へ筋かひよと志ざし氷らゝ結べる田を横に打つ程は深田は馬を馳入れて打てどもく行かざりけり 狗猶ほも放たず喰ひ付き居たり主見るは長さ二丈餘なる蛇なり 越後の國某の郡に在ける濱は小き船打寄せられたりける廣さ二尺五寸深さ二寸長さ一丈許なりの類 解釋名詞とは尋常の名詞の如く體を造りては其意通ぜざるを以て故らゝ其意義を解き明かして名詞の體を作るものを云ふ彼の白河少將定信朝臣(松平越中守)の(心)あてゝ見し夕顔の花散りて尋ねぞ詫ぶる黄昏の宿と詠まれしをもて黄昏の少將と稱するか如く

國語學文典

唯少將とのみ言ては何れの少將なるや知るべからず故また。そ。か。れの四字を少將の上より冠らせて此少將は嘗てたそかれの歌を詠まれし少將定信朝臣なることこの義を解釋し其意を志て通曉し易からむる類是れなり

其例を舉れば

公世八條相國實の二位の兄人よ良覺僧正と聞えしは極めて腹あしき人なりけり坊の傍より大きな榎木の有りければ人榎木の僧正とそ言ひける此名然かるべからずとて彼の本を切られよけり其根の有りければ切株の僧正といひけり愈々腹立ちて切くひを掘り棄てたりければ其跡大きな堀よて有りければ堀池の僧正とぞ言ひける

初音の僧正とは興福寺別當永縁が嘗て聞く度よ珍らしけれ

は時鳥いつも初音の心地こそすれと咏せしをもて志か名けしなり

沖の石の讃岐とは源頼政の孫女讃岐が我袖は汐干よ見えぬ沖の石の人こそ知らぬ乾く間もなしと咏せしより志か名けたるなり

手枕の兼好とは吉田兼好が手枕の野邊の草葉の霜枯れよ身はならはしの風の寒けさと詠みしを以て然か呼ひしなり

薄墨の神主とは國基が薄墨よ書く玉章と見ゆるかな霞める空よ返る雁かねと詠みしをもて然か名けたるの類

尊稱名詞とは他を尊敬して呼ひ稱するものを云ふ第一天子よ對志ては上、主上、龍顏、聖躰、御衣、鳳華、上皇、皇后、皇太子、皇弟、皇孫、天使等なり第二一般に對しては卿、君、先生、夫子、阿兄、令嬢、尊叔等是れなり

國語學文典

國語學文典

但姓名の尾シ添て尊敬を表はすものは神武天皇陛下シ護良親王殿下シ大將軍德川家康公閣下シ山陽先生侍者シ徂徠先生函文鳩巢先生足下の陛下シ殿下閣下シ侍者函文足下の類なり

其例を擧れば

景行天皇は垂仁天皇の御世三十年正月甲子の日東宮ニ立ち給ふ

玉辰ニ咫尺して召使れける人としては六條少將忠顯頭大夫行房女房ニは三位御局ばかりなり

又孝德天皇の御宇大化二年正月一日御朝拜ノことはべるよし同じ書メのせたり

主上女院を始め進らせて

徳川殿ニそれまでも及びさふらはし物をと仰せられしかど

國語學文典

主上ニすなはち南殿の御簾を高く捲せて玉顔ニ殊ニうるはしく諸卒を照覽ありて正行を近く召してまた管先生福山より扶持頂戴致し居られ其養子あしらひよ仕候へば

七月二十六日頼久太郎築山奉盈先生案下

母御前ニも弟ニも後れて憑む方なしの類

遷言名詞とは謙遜志て自己を指し呼ぶものを云ふ即ち臣僕私拙者小生豚兒荆妻寡君寡人等の類是れなり

其例を擧れば

臣眞琴學びの博からざる才えの鈍きよ

誠ニ愚父へ御舊交も御坐候得ども小子幼少より御懇意ニ被

仰下御馴染ニ被思召下候ゆゑ

國語學文典

私安心仕候義は御生候

隣藩有志の者ども九州邊より指廻し勤王の儀申談可仕候  
又白周布政之介三條公までも申上候儀未だ委細は承及不申  
候得ども寡君より直命を受け差登候事は付の類

嘲罵名詞とは他人を罵詈嘲弄して甚た卑劣むものを指て名くる  
なり即ちさやつ(彼)壁子鼠輩老賊豚犬野郎の如し

其例を舉れば

門の前は馬をかけすゑもの其ものよはあらねど安藝守の郎  
等伊勢の國の住人山田の小三郎維之生年二十八堀河の院の  
御宇嘉承三年正月廿六日但馬の守義親追討の時故備前の守  
殿のまつ先かけてくげよも知られ奉りし山田の庄司ゆきす  
ゑが孫なり山賊強盜を縛め捕る事は數を知らず合戦の庭は

國語學文典

も度度及びて高名したる者ぞかし承り及ぶ八郎御曹子を  
一目見奉らばやと申しければ為朝一定きやつは引きまうけ  
てぞ云ふらん一の矢をば射させん二の矢をつかはん所を  
射落さんず同トくは矢のきまらん所を我が弓勢を敵に見せ  
んとの給ひて

獨の盗人押入の衣類雜具や脇差の刀を奪ふ物音は奥より  
たる姑めの聲立てければそやつ切れものな言せそ

下野は蒲生君平と云ふ人あり亦偉士なり林子平の人と爲り  
を聞きて常之を慕ふ或る日子平を訪ひしが君平は性真率  
まして邊幅を飾らず蔽袴を穿ち短褌を着け其行装殊は鄙野  
なり子平見て叱して曰く何物の窮措大なりや自から修むる  
こと能はずさて敢て人よ望まんやと君平も亦怒りて曰く野

國語學文典

翁何ぞ自ら尊大なると遂に一語を接せずして去れりの類  
 用言名詞とは元と終言とあらずして用言〔作用形状〕より出で、  
 假りよ名詞となるものを云ふ故に又た假終言とも云ふ即ち踊謠、  
 告樂、行達、後馳、晴、曇、惠、敬、喜、怒等の如し  
 其例を擧れば

今の音曲よても謠ひ小鼓など時時もてあそぶへき事  
 此海をまはるものならば七八日よめぐるべし直ぐは渡らば其日  
 の中よ政めつべければ忠恒渡の舟どもを皆取隠してけり  
 榮啓斯が三の樂は人となり男子となり命長きをいへりしはまこ  
 とよさる事なり  
 大君の御惠よよりて斯る太平の御世よ生れの類

名詞の組立

國語學文典

名詞よは連合せる思想を顯はす爲めよ種種の言葉の合并す  
 るものあり之れを名詞の組立と云ふ此組立を分て並立組立。  
 反對組立。形容組立の三種とす

並立組立とは別別よ相立てる物の名を合併したるものを云  
 ふ例へば和漢、薩長、日月山川、草木、鳥獸の類  
 反對組立とは互よ反對する所の物の名を合併したるものを  
 云ふ例へば長短、前後、左右、有無、巧拙の類  
 形容組立とは物の名稱と有様とを合併したるものを云ふ例  
 へば金時計、牡牛、赤旗、長竿の金は時計の物質を顯はし牡は牛  
 の性質を顯はし赤は旗の色、合長は竿の計度を顯はす類の如  
 し

名詞の性



國語學文典

動植物の名詞中は男女の性を分別する二種の性あり之れを男性女性の名詞と云ふ  
男性の名詞とは天子親王君主公子世子嫡子殿夫婿父兄弟僕  
牡牛雄鷄雄藥の類  
女性の名詞とは皇后皇女皇妹夫人母姉妻婦乳母妾婢北馬雌  
鷄雌藥の類是れなり

名詞の單複

名詞は物の單數複數を示すもの二種あり  
複數とは事物の二個以上にて成り立ちたるものを云ふ例へ  
は萬國諸君臣等弟子達女共の類なり又文章に就て言へは地  
球の表面に縱横の線ありと云ふ文中の線字は上は縱横と云  
ふ言葉あるをもつて複數なることを知り經線は皆南北の極

國語學文典

代名詞の六種

- 自稱代名詞
- 他稱代名詞
- 特稱代名詞
- 指示代名詞

代名詞を分て自稱代名詞他稱代名詞特稱代名詞指示代名詞不知  
代名詞疑問代名詞の六種と爲す

より引き出したる團なるを以てと云ふ文の經線字は下は皆  
と云ふをもつて亦た複數なるを知るべし又言葉を重ねるのみ  
よて複數となることあり例へば國山山川等  
單數とは幾個あるものと雖唯其内の一を顯はすを云ふ一人  
と云ふ如きものは是れなり

國語學文典

不知代名詞  
疑問代名詞

自稱代名詞とは自己の名を呼ぶ代りを用るものを云ふ即ち己我予余其妻の類是れなり

其例を舉れば

我は延寶の終りの年よ生れて常憲院殿の御代より此かたはまさしく此身よ歷つれば童稚の時より是まで五十餘年の事をば目よ見たり父のかたり聞かせつると我まのあたり見つる事を思ひ續くれば百年の餘變歴歴として目の前よ有るか如し

吾よ從ひて物學ばんともがら吾後よよき考の出て來らんよは必ず吾説よな泥みそよ

國語學文典

他稱代名詞とは他人の名を呼ぶ代りを用るものにて即ち彼汝女爾吾子の類是れなり

其例を舉れば

もし剛敵堅陣あらば汝よ命えて此よ當らぬめん倍倍の兵なくとも恐るゝよ足らず群を抜き衆をこえ撃ちて之を取ると別人は及ぶべからず是れ汝が長ずる所なりとなだめられければ森本君よ思召し候へば面目あるよ似たりとて已みぬ是れ清正假よ辭を爲して森本が憤を止めらるゝよあらず賢

國語學文典

「清正士を用る一代の心法なるべし  
 仁齋先生存在の時大高清助と云ふ人通從録を著し大先生  
 を非議す門人彼書を持ち来て示し且これが辨駁を作らんこ  
 とを勸む先生微笑してことば無し彼の門人怒りつぶやきて  
 云ふもし先生辨ぜずんばわれ其任もあたらんと先生あづが  
 よ言ひて曰く彼是ならば吾非を改めて彼が是も從ふべし  
 し我是も彼非ならば我是は即天下の公共なり固より辨を待  
 たず又あうして彼も又自から其非を知らん汝只みづから修  
 めよ他を顧みる事なかれとぞ先生の度量大旨此類ひなりと  
 或人語りとの類

特稱代名詞とは尋常一般の人には用ゐずして特天子諸侯のみ  
 之を用ゐ其名を代て呼ぶものを云ふ即ち朕寡人の類是れなり

其例を擧げれば

朕は汝等軍人の大元帥なるぞされば朕は汝等を股肱と頼み  
 汝等は朕を頭首と仰きてぞ其親は特深かるべき朕が國家  
 を保護して上天の恩に應じ祖宗の恩に報いまゐらす事を  
 得るも得ざるも汝等軍人が其職を盡すと盡さざること由る  
 ぞかし我國の穢威振はざることあらば汝等能く朕と其憂を  
 共よせよ我武雖揚りて其榮を輝さば朕汝等と其譽を諧よす  
 べし汝等皆其職を守り朕と一心となりて力を國家の保護よ  
 盡さば我國の蒼生は永く太平の福を受け我國の威烈は大よ  
 世界の光華ともなりぬべし

主上、是は天の朕に告げ給へる所の夢なりと思しめしとの類  
 指示代名詞とは事物の名を代り以て之を指し示すものを云ふ即

國語學文典

ち之是此其彼の類是れなり

其例を擧れば

昔は草木生茂りて此石あることを人も知らざりしが四五十年以前樵人の木を伐る群の響きけるを始は之を異しみ懼れて逃走りしは後には聞ねられて遂に名ある石よぞなりしと云ふ

心なき草木も是を悲みて花咲く事を忘れつべし

手塚敵の首を即等と持たせて木曾の前より持ちて行き申しけるは光盛薙者の首取りて候名乗れと申せば存ずる旨あり名乗るまじ木曾殿は御覽ト知るべしと計りて名乗らず侍かと思れば錦の直垂を服したり大將軍かと思へば續く者なし京家西園の者かと思れば坂東群なりき若き者かと思へば面の

國語學文典

皺七十餘は疊めり老者かと思れば鬚鬚黒くして盛りと見ゆ何者の首ならんと申す木曾打ち紫トて衰れ武藏の齋藤別當よや有らん但其は一年かすかよ見しは白髪之糟尾は生トたりしが今は殊のほかは成りぬらんを鬚鬚の黒さは何やらん面の老いごまはさもやと覺ゆ實は不審なり樋口は古同僚見知りたるらんとて召されたり鬚を取り引き仰がせて一目打ち見てはらはらと泣きあな無慙や實盛よて候ひけりと申す何は鬚鬚の黒さはと問ひ給へば樋口されば其事思ひ出でられ侍り實盛日比申し置き候ひしは弓矢取者は老体よて軍陣よ向はんよは髪は墨を塗らんと思ふなり其故は合戦ならぬ時だよ若き人は白髪を見てあなづる心あり況軍場よして進まんとすれば古老氣なしと惡み退く時は分よ叶はずと誇ら

國語文學典

ん賢も若人と先を争ふも憚あり敵も甲斐なき者も思へり悲しき者は老の白髪なりされば俊成卿述懐の歌も澤も生ふる若葉ならねど徒らも年をつむも袖はぬれけりと讀み給ひさとかや人は聊の物語の傳も後の形見も言をば殘し置くべき事なりと云ひしよ違はず墨を塗りて候ひけり年来内外なく申さし事の衰さよ樋口次郎兼光水を取り寄せて自から是を洗ひたれば白髪の尉もぞ成りよけるさてこそ一定實盛とは知られけり

船の中より年のよはひ十八九ばかりなる女房の柳の五衣イソノキヌの袴着たるがみな紅の扇の日出したるを船のせがいはさみたて陸へ向てぞ招きける判官後藤兵衛實基を召して彼は如何よと宣へばの類

國語文學典

不知代名詞とは知れぬ人と知れぬ事物と知れぬ数を言ひ顯はす爲めよ代へ用ゐるものを云ふ即ち或某誰何幾何若干の類是れなり

其例を擧れば

原氏某は岡安の門人よて寶永の頃より三弦を以て鳴りたる人なり或日品川の或樓よ行きける時三弦の音つねよ變りたるを聞きて海嘯の有るべきを知り其席を終らず一坐の友を誘ひて急よ歸りけるよ程なく大よ香潮志て浪の爲めよ其ほとりの家ども流矢し人も多く損下たるよし一時の技藝といへども其妙よ至りしを人人感下けりとぞ

賊のいへるは余十餘山よ棲みて一度もおそろしき者を見ず唯一度これ有り去年何某夜何某の山中よイザみ人を待ちし

國語學文典

と大なる男一人出て来るを見て吾等四人立ちふさがりて酒  
錢を乞ひしよ其人大番よて慮外者めと叱りて傍よ人なきが  
若くのかのかと志て過ぎ行しかば四人各々尻もち付き暫く  
物をもいばざりき其聲の大きき山よ響きてすさまじく稍あ  
りて其人を見れば半町許も行き過ぎて跡を見かへりし眼光  
りておそろしき事限りなかりき是こそ天狗などいふ者よて  
も有りつらめといひき

同十二月白銀十枚を給ふ是よりさき群書類従のうち版成り  
たるもの若干巻を奉るが故なりの類

疑問代名詞とは凡へて事物を疑ひ問ふ所よ用ゐるものを云ふ即  
ち誰何如何の類是れなり

其例を舉れば

いづれも互よ引かざりけるがさすが無勢なれば梶原下手よ  
廻て虱と引こぞ出たりける源太は如何よと問へば御方を離  
れて敵の中よ取こめられ給ひぬと云ふ

ことし何なる年なれば百官罪なうして愁の涙を配所の月よ  
滴く一人位をかへて宸襟を他郷の風よなやまし給ふらん  
判官味方よ射つべき仁は誰か有ると宣へば

とこしへに清らかよして物よ滞る事なきを吾心とはせんと  
思ふよ此べてんものは何ぞ唯月と瀧つ瀬とのみ

何方よゆき隠れなん世の中に身のあればこそ人もつらけれ  
夏の夜の月待つほどの手読びよ岩瀨る清水幾く結ひしつ  
さても又いはで年經る言の葉はいづれの秋か色よ出つべき  
の類

代名詞の稱呼

代名詞とは一人稱、二人稱、三人稱の三つの區別あり

一人稱とは己の名の代りを用ゐる稱呼にて我、余、私、僕の類なり

二人稱とは己に對する人の名の代りを用ゐる稱呼にて汝、君、其方の類なり

三人稱とは己に對する人の外の者の名を代て用ゐる稱呼にて他、彼、其の類なり但し古言には我を又わ、汝をな、彼をか、又あを云ひしなり

指示代名詞の省畧及増加

指示代名詞の是(レコ) 彼(レカ) 夫(レア) 其(レソ) のれを省畧してこ、か、あ、そと云ふこともあり又これよらとこよのを添へてこ

の、かの、あの、そのと云ひこれら、かれら、あれら、それらと云ふらの付きしは複數と知るべし

指示代名詞の通用

又あの、そのの二つ、意を通はして同様用ゐることもあり例へば人に向ひてあなたともそなたとも云ふが如しあなたはもどあのかた、そなたはそのかたの畧言なり

數詞を分ちて我國固有の數詞、支那傳來の數詞の二種と爲す

數詞の二種

固有の數詞 傳來の數詞

我國固有の數詞とは我國人もとよりの稱へよてひとつ、ふたつ、みつよりもちよろづよ至るものを云ふ此數詞は組み立てを作る時よつとを省くことあり例へばふたたび(二度) むま(六間)

國語文學典

とつき(十月)の如し此數詞の緊要なるものを舉れば一振(劍)二張(弓)三柱(神)四重(衣)五腰(刀)六組(盃)七流(旗)八折(菓子)九揃(馬具)十筋(籠)一戸前(藏)の類なり

其例を舉れば

夏はよる月の頃は更なり闇もなほ螢多く飛びちがひたる又只ひとつふたつなどほのかうち光りてゆくも最をかし  
田中道磨が語りけるは鴨よ大かた四種あり  
又かかるとさやけさは人人の百夜の秋の行末は幾そ度かあらん己が世のみを三十よを四十の越方又は未だ見ざりけり  
となん言ひあひつと  
藜杖よすがり一人かちよりゆきたるぞ心静かなると思ふも  
ありの類

國語文學典

支那傳來の數詞とは支那より傳へ來るものよて一、二、三より百、千、萬、億、兆に至るを云ふ此數詞の中よ名詞と組立る時音便よて少少く變更するものあり例へは六本をろつほん十編をトつべんと移せるが如し傳來數詞の緊要なるものを舉れば一箇箱二挺(小刀)三封(書翰)四幅(掛物)五杯(酒)六疋(馬)七本(竿)八軒(家)九部(書物)十枚(紙)一座(神)二門(大砲)の類なり但し我國固有のものよ傳來の數詞とを合せ用ゐることもあり是れを合併數詞と謂ふ例へは劍トふよふり十二振の類なり

其例を舉れば

瑞大人保己一幼名を寅之助といふ五歳の年より肝を病みて七歳の春俄よ盲目となる十二といふ年母を失ひて憂ひ惚ぶ事尋常ならず是より漸く東都よ出でて業をなすべき心起さ





國語學文典

源(ジアラカ) 專(ハモツ) 聊(サイサ) 先(ツマ) 馳(ヤガ) 豈(ニア) 寧(ムシ) 必(ラズナ) 争(デイカ) 原(トモ) 素(ヨリト) 只管(スヒタ) の類是れなり

其例を擧れば

葉は置く露の光りも潔き操よは譬ふべかりけり何かは玉と欺くと讀まれたるは惟藏れのみ

其右へ相距ること百餘歩よ志て縦あり

今日坐よ臨みても猶辭み申しけるを

物よよりて懷舊の情あること人皆然かり

楠既よ封れよければ

師の説なりとて必泥み守るべきよもあらず

國語學文典

文章未だ彰はれず功業未だ成らざるを慨み  
 墓前を徘徊して暫く去るよ忍びず  
 日は最と長き頃なれどもの類

名詞副詞とは名詞の動詞よ副ひて其舉動を顯はすものを云ふ即ち日(ニヒ) 月(ニツキ) 年(ニトシ) 朝(ニアサ) 夕(ニエフ) 時(ニトキ) 右(ニミキ) 左(リヒタ) 東(シヒカ) 西(ニニシ) 内(ニウチ) 外(ニホカ) 上(ニカミ) 下(ニシモ) 前(ニマヘ) 後(ロウニシ) 横(ニヨコ) 縦(ニタテ) 半(バナカ) 今日(フケ) 明日(スア) 日日(ニヒヒ) 年年(シトシド) 夜夜(ヨルル) 時時(トキキ) の類是れなり

其例を擧れば

五帝の道廢たれて風俗日よ下りゆくこそなげかはしけれ古

國語文學典

古今の英主賢臣時<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>ト

朝<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>てで正理を説き大道を論し暴を倒し弱を援け貪利の徒を斥けて災厄<sub>レ</sub>懼<sub>レ</sub>るの窮民を救ひ夕<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>て書を清風の中<sub>レ</sub>に縋き深を釣り奥を極め妙旨を窮覽す

虚禮日<sub>レ</sub>滋<sub>レ</sub>く苟且の收年<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>はり

前<sub>レ</sub>並<sub>レ</sub>ひ給ふ觀世音と拜み奉る御像は一尺二寸計り

我は今日行く

鶯の鳴くなる聲は朝な朝な聞く

習へども時<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>ざれば其習はず所熟せず<sub>レ</sub>亦遂<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>ること能はずの類

代名副詞とは代名詞よて副詞となるものを云ふ即ち茲(ココ)何(ドコニ)何(イツコニ)何(イツレ)如何(イカ)の類是れなり

其例を擧れば

後れトと馳來るあり怪まう思ひて見れば豊原時秋なりけり  
あれは如何<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>りたるぞと問ひければ兎角のことは  
言はず惟御供仕るべしと計りぞ言ひける

源太佐佐木鎌倉へ早馬を立て何れも劣らト負けトと馳て行  
く源太が早馬は先立たりけるが如何<sub>レ</sub>志<sub>レ</sub>たりけん足柄の山  
中にて高綱が早馬先立ちぬ

郎君遠歎翼を振ひ名を汗青<sub>レ</sub>垂<sub>レ</sub>れよ良時茲<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>り失ふ勿れ  
日既<sub>レ</sub>薄暮なれば爰<sub>レ</sub>宿<sub>レ</sub>りぬ

前大和守時賢が墓所は長谷と云ふ所<sub>レ</sub>あり其處<sub>レ</sub>留守する  
男縛<sub>レ</sub>りを懸けて屍を取りける程<sub>レ</sub>或日大鹿<sub>レ</sub>かかりたりける  
の類



國語學典

せあへ手塚と云ふ體よの類  
 動詞副詞とは動詞よて副詞となるものを云ふ即ち押并、始、終、打、  
 絶、返、行行、(ユク) 泣泣、(ナク) 益益、(マス) 代代、(カハル) 取取、  
 (トリ) の類是れなり

其例を舉れば

二條河原へ押寄せて在在處處は火をかけ三所は関をぞ揚げたりける

勢田の長橋打渡り行きかふ人よあふみ路や

此山里よは移るひ住めるよなんありける

鹿は事故なく走りて逃げ行きよけり

昔を思は伊豆の奥の赤澤山の狩競よ父も失させ給はずや今  
 逆も狩場とあらばなどしも御心よも懸げざると恨み顔よて

國語學典

形状副詞とは形状言の副詞となるものを云ふ即ち善、(クヨ) 惡、(クワロ)

兄弟は泣泣立ちて出ければ

三味線を鳴らし淨瑠璃を語る事唯市中の賤き者のみなりし

それさへおほかた人よ隠くして忍忍ひよ習ひしぞかしの類

早	遅	遠	近	長	短
(クハヤ)	(クオソ)	(クトホ)	(クチカ)	(クナカ)	(クミチ)
薄	厚	高	低	白	黒
(クウス)	(クアツ)	(クタカ)	(クヒク)	(クシロ)	(ククロ)
明	暗	重	輕	嬉	悲
(クアカ)	(ククラ)	(クオモ)	(クカク)	(クシウ)	(クカサ)
樂	苦	賤	貧	寂	喧
(シタノ)	(シクノ)	(シイヤ)	(シマツ)	(シサヒ)	(ヒカマ)
怪	空	正	烈	美	涼
(シクシ)	(シアヤ)	(シムナ)	(シマサ)	(シハケ)	(シウツク)
歎	紛	頼	美	善	惡
(シクス)	(ナケカ)	(ハシク)	(シクモ)	(ウシヤ)	(ヨク)

國語學文典

疾疾(トク)の類是れなり

其例を擧れバ

嶺より京都及び山城諸山善く見えて佳景なり

楫取り物の僻れも知らで已し酒を喰ひつれば早く往なんど

て潮満ちぬ風も吹きぬべしと駭げば船も乗りなんどす

連錢茸毛の馬の太く逞ましきよ金覆輪の鞍置きてを乗りた

りける

凡そ財有らば有益の事をなすべし財を惜むべからず我が

力は随ひて施すべしかく善を行ひて人を助けば家富み財多

く持てる甲斐あり

年頃すぐれてかしこき狗ありしが俄よ起來りて主よ向ひて

夥しく吠えければ主何を吠ゆるよやと異しく思ひて見ぬぐ

國語學文典

らすに吠ゆへき物なし

走り掛りて夜を刺かんと思ふよあやしく物の恐るく覺えけ

れば添ひて二三町ばかり行けども

彼人の隣よ瘰ある人此事を聞て美ましく思ひ件の朽木の中を

尋ね行き一夜を明かしければ

義家朝臣十二年の合戦の後宇治殿へまゐりて戦の間の物語

をけるを匡房卿よくよく聞れて器量はかしこき武者なれど

も猶ほ軍の道をば知らぬと獨言よいはれけるを

大將軍の宣旨を蒙る程の人の難人の中に打伏せられ首を取

られん事心憂かるべし速速落ち給ひて御自害あるべしとす

すめければ本曾誠よと恐ひ向かひの岡の松をさして馳せ行

きけり

國語學典

の類

疊言副詞とは言葉を重ね疊みて副詞となすものを云ふ即ち彌彌  
 (イヨ) 屢屢 (シハ) 適適 (タマ) 會會 (上全) 交交 (コモ) 各各 (オノ)  
 間間 (マ) 紛紛 (フン) 餅餅 (ソウ) 洋洋 (ヤウ) 歴歴 (レキ) の類是  
 れなり

其例を擧げれば

重忠存外げと思ひて彌彌深く畏りていふ事無し

愚公聞きて我代より壞ちそめて我子の世も繼いでこぼち  
 我孫の世も亦其子の代もつづいてこぼちなば終は脇  
 へ移さぬことやあるべきと言へばいよいよ笑ひけるとなん  
 記し置けり

獨り熱熱思ふやう我身の民も君たるは榮華を求むる爲めな

國語學典

らず民の利益を謀るが爲めなり  
 衆多の兒童は皆皆歸り去りける跡  
 戦等渡すと見るならば敵は矢ぶすま作りて射んざらん敵は  
 射るとも各各返へし矢射んとて河の中よて弓引て推流され  
 て笑はるな

天文よかたどり地理よ法りておのおの司る方あれば其才無  
 くては任用せらるべからざる事なり  
 其の男を呼びて見せたまふ二十枚を重ねてつくづく見るふり  
 志てもちたる拵よて微塵よ碎きたり

今宵は月もよし薄酒すゝめ參らせん強ひてとまり給へとい  
 へば翁の心よはいかで背くべきさあらばとて各座を占めて  
 清談の露漸漸繁き程よ家人やがて心得て取敢へぬまでよあ

國語學文典

るトまうけし者とり添へて盃出したり諸客皆酔うて興入  
るとぞ見えし

此項は天氣屢屢曇りて雨多し

予之れを聞き以爲らく命運茲に極まれりと胸惕惕と志て悻  
き怒氣勃勃と志て發す

今天下紛紛と志て亂れ豪傑四に起る

既と志て激浪波窓を破り流沫颯と志て船中に入る時と器物  
破碎の響船夫號叫の聲悽悽慘聞くと堪えざらしむるの類

漢語副詞とは漢音讀の熟語を以て副詞と爲すものを云ふ即ち大  
抵、大概、大略、一切、一向、殊勝、充分、隨分、漸次、丁寧、反覆、微塵、  
急遽の類是れなり

其例を舉れば

國語學文典

儉素などを云ふは寒酸儒生の陋見なりとて一向は用ゐず

今昇平の代は當りて人心も柔弱なるも斯る潔死の勇斷は殊  
勝に見えて最もも憚れを催しぬ

もはや生え出てたるべしとて重箱のふたを開くと件の砂中  
は二葉の青菜充分は生え出でたり

學生の常としてはトめの程は隨分正しく勉強すれども

聖を去ること數千載なれども論語の一書ありて今日諸弟子  
も共に親しく教を聖人を受くるが如し書中は就きて反覆玩  
味し類は觸れて長ずる時は是を言行は施して一として備ら  
ざるることなし

二十枚を重ねてつくづく見るふりしてもちたる拵よて塵微  
は碎きたり



國語文學典

今一曲前の如く哀れなる事を聞き度しといひければ那須與市宗高が扇の的を語りけるは平家な加ばより天徳寺又落涙數行に及べり

未だ一概に看過すべからざるなり之類

有尾副詞とは漢字音の下に然爾乎焉等字の附て其尾となり副詞となるものを云ふ即ち寂然、傲爾、確乎、忽焉、謙謙然の類是れなり忽ち織雲月を隠し人影注とあて分つべからずノ注ハ元ト其下ニ然字ヲ附テ茫然とあてニ造ルベキモノヲ省畧シテ然カナセシモノナレハ又此處ノ副詞ナリト知ルベシ

其例を擧れば

四人忽然とあて起立し相見て未だ一語を發せず

予時は恐怖の念已ま去て必死の心已ま決す唯茫然とあて立て飛沫の中は在り

國語文學典

其病根をよく知りて源より療治を施して風俗を移す時は今世ざれども行はる是れを無爲とあて治すと云ふなり無爲と云ふを世の儒者あしく心得て己は徳あれば手を袖とあて默然として居ても自然と感通することばかり覺ゆるは眞言僧の視法を以て妙用をなすと云ふは餘り違はぬことよてもと聖人の道は味さゆるは斯の如き陋説あることなり  
胸暢然とあて恃き肌忽爾とあて戦き寒栗殆と體は冷し自ら顧みて輒然とあて笑ふ  
潭中の魚百許頭ばかり皆空は遊て依る所なきが如し日光下徹し影石上は布き怡然とあて動かず傲爾とあて遠く逝き往來翕忽遊ふ者と相樂むは似たり  
後會の續くなきを傷て前事の追ひ難きを帳み揚柳春風の院

國語學文典

を鎖ざし梨花夜雨の門を閉ち音容奇とて接するなく心緒  
亂れて紛紜たり

此間夢の如く幻の如く夢とて明かならずの類

接續詞を分ちて起語接續詞、重複接續詞、假設接續詞、指示接續詞、  
進歩接續詞、反轉接續詞の六種と爲す

接續詞の六種

- 起語接續詞
- 重複接續詞
- 假設接續詞
- 指示接續詞
- 進歩接續詞
- 反轉接續詞

國語學文典

起語接續詞とは言ひ起こしの時と用ゐて接續詞と爲すものを云  
ふ即ち抑(ソモモ)蓋(シケタ)夫(レソ)惜(テサ)但(シタタ)去程(トサルホ)  
の類是れなり

其例を擧れば

天下は通用する所の金銀の多少に依りて大に得失あるべし  
抑金銀を廣く通用する事は慶長の頃より始まれる事とて其  
以前は只錢のみなりき

悉逆無道の其積り神明佛陀の冥感に背き天命に沈みし平氏  
の一類主上を始め奉り一門の月卿うんかの如く浪に浮ひて  
見えたるそや抑是は桓武天皇九代の後胤平の知盛幽靈なり』  
箋の中より往來の巻物一卷取り出し勸進帳と名けつつ高ら  
かよこそ誦み上げけれ夫れつらつら惟んみれば大恩教主の

國語學文典

秋の月は淫<sup>チ</sup>樂の雲に隠れ生死長夜のなかき夢驚るかすべき人も無し

湊川より懸る勢は眞氏直義と覺る是こそ願ふ所の敵なれとて西の宮より取て返し生田の森を後し當て四萬餘騎を三手に分けて敵を三方より受られける去程は兩陣互に勢を振ひて鬨を作り聲を合す

我獨り都の内より留りても何かせん我をも君の御座あるなる國のあたりへ流し遣せかし責めては餘所ながらも御行末をうけたまはらんかこかきくごき打ち志をれて御涙さらよせきあへず初も君の押籠められて御座ある白川は京近き所と聞くは宣明など我を具足して御所へは參らぬぞと仰ありければ

國語學文典

何卒本制を考へ追追修舉在せられ度御事なり但し京師災後今日皇居の御造營新に初まりし御事なれば侍従出違ひ請入れ奉りて良久去く御物語申しけりさても宮の御方へ角と申されよと仰ければ侍従參て御氣色を伺ひ進らせけり宮斜ならず御悦有りて此方へと仰けり大將南庭を回りにて彼方此方を見給ふよもの類

重複接續詞とは事物を重ね復ぬる時の接續に用ゐるものを云ふ即ち又(タマ)亦(モマ)且(ツカ)將(タハ)或(ヒアル)の類是れなり其例を舉れば

凡そ人の不孝不忠諸くの惡を行ひ慾を恣にし身を亡ぼし家を滅ぼすに至るは何よかよれる知なければなり又善を行ひて家を興し身を保ち譽れを得るは何の故ぞや知あればなり』



國語學文典

ひ出てたるぞやかかる時節を伺ひて恨をなすも理りなりいかば辨慶御前も候今更ら驚くべからず縦ひ慈鹽恨をなすとも何程の事かあるべきぞ

此時一群の中にて其齡最も幼く可愛き容顏の中も凜然たる氣象あらはれたる一人の童子先づ發言志けるは諸兄は二人の中何れを好むや余は最も士良武スライグエニヌも爲り度く思ふなり若し我我成人の後よ至り我が國よ三十圻黨の如き者あらば余は身を棄てて士良武の如く人民を濟ふべしの類

指示接續詞とは前よ説きし事物を指し示して接續詞となるものを云ふ即ち故(ニユヘ) 則(ハスナ) 乃(ハチ) 上(上全) 即(即全) の類是れなり

其例を舉れば

毎年の秋よ成り代官並よ手代等の役其地を巡行志て穀の熟

國語學文典

不熟を視て上熟よは多く取り下熟よは少く取る俗よこれを免と云ふ代官の巡行志て見たる通りを其領主よ告げて領主より其年の免々定めて文書を氏よ下志て租を徵す是を免狀と云ふ免狀下りて免狀の如くよ收納す故よ是を視取と云ふなり  
上熟の時多く取らず故よ下熟の時よ及びて氏其上を怨むること無し此法は則孟子の云へる貢法よて夏の代の法なり  
心誠よ孝ありて毫も我が爲よ思ふこと無きものは其心即ち父母の心なり  
若し悠悠として日を涉り一旦年老い齡傾きて後日頃の懈を思ひ出ていかよ悔ゆとも何の益あるべき即ち今翁が身の上よて候の類

國語學文典

進歩接續詞とは歩を進めて説き去る所よ用ゐる接續詞を云ふ即ち而(シカフ) 然(シカラハハ○シカレハハ)の類是れなり

其例を擧れば

故よ先づ戦はんを欲する者は豫め彼我の勢を詳かよし而して其謀を運さるべからず

其左右よは囚人等の口供を筆記すべき衆多の書記生並列したり而して法官の着席する高坐の下なる平面席は則ち囚人の立つ所よ是て囚人席の左右よは非常の事變よ備ゆる爲め衆多の衛士居連りたり

事業中最も難しとする學問の道よして既よ然り然らば其他の事の如き此心得をもて勉むるよ於ては何事をかなし果さざらんや

國語學文典

世よ智ありと稱する程の人は大方智叟が心よて愚公が山を移す様のことを聞ては其愚を笑ふほどよ何事も其功を成就せぬなるべし然れば世の所謂る反て愚なり愚は反て智なりそれ故よ禦寇が世を諷してこそ斯は言ひつらめの類反轉接續詞とは上文説き來りし事物の反對よなる意よて一轉し接續となるものを云ふ即ち而(シカルニ○) 然(全上) 然而(シカシカフ) 雖(イヘトモ) 然りと雖もの類是れなり

其例を擧れば

女史が其親友を悼み碑を海岸よ建てんとす情義實よ稱するよ堪えたり又汝が之よ代りて其勞よ當るは最も其宜きを得たる者と謂ふべし然れども余熟熟之を思ふよ夫の二人果して長逝の容となるか皇天明あり志士仁人を擁護して猶ほ身

國語學文典

を今日に究ふるか未だ明かならざるあり而るに碑を建てて魂魄を弔はんと欲す豈又太だ早からずや  
凡天下の事愚公が心ならば遅くとも一度は成就すべし然るに世は智ありと稱する程の人は大方智叟が心よて愚公が山を移す様の事を聞ては其愚を笑ふ程は何事も其功を成就せぬなるべし

中一唯吾が聖人の建て給へる三綱五常の道のみ天地と並ひ傳へ古今の隔てなく是ばかりはかはる事あるべからず人として仰き崇ぶべきは此道ぞかし然れども儒教世に行はれざりしより人人義理を疎く利欲を敏くなる程は五常の道すたれて風俗日よ下り行くこと歎げかはしけれ  
噫呼女史が大事に臨て情を繕め意を抑へ父を控行の中に見

國語學文典

て顔色變せず言語常の如く從容とまて密計を行ふの状深沈勇邁古の烈女と雖も遠く過ぐることを能はざるものあり  
余が得る所は小なりと雖も色鮮よまて味美なり君が得る所は其容徒よ大よまて色味俱よ及ぶなし  
凡そ人は平常得意の時よ於ては其心身よ餘地あるか故よ如何なる容体をも矯飾し得べきものなり然れども一朝艱難危厄の際よ當ては之を矯飾するよ暇あらざるが故に人物の眞價は只艱難危厄の間よ於て其品評を下すべきものなり  
是を以て其外貌漸漸開雅の風を習ひ徃徃朴野の陋を脱す然りと雖も其中情未だ曾て文明の点よ赴かず  
夫れ善く戦ふ者は不敗の地よ立て敵の取を失はず今夫我兵遠く西南よ逃かんか英兵其後よ尾し以て我か據を衝かんと

欲するや必せり然れども彼れ地勢よ暗く水理を知らず糧食よ乏しく氣候風土よ慣れず熱風の酷暑氣の烈勇氣を挫折して遂に邪氣の流行を招き萬里の沙漠前よ瀰漫し人病み馬瘦れ米だ陣を布き刃を接せず必ず其大半を失はん然り而もて我軍は則ち旬月を出です精兵七萬突騎三萬糧よ應えて戦城下よ群蹙すること明かなり因て壘を結ふ千里旗を江原よ樹て以て其來るを待ち輕兵を放ちて敵の不意を襲ひ土兵をえて出汲其輜重を劫かし以て彼の衰勢よ乘せは元帥謀畧よ奮むと雖も器械精練を極むと雖も豈又恐るゝよ足らんやの類

感歎詞を分て敬賞感歎詞、悲慨感歎詞、怒罵感歎詞、驚怖感歎詞、呼醒感歎詞の五種と爲す

感歎詞の五種

- 敬賞感歎詞
- 悲慨感歎詞
- 怒罵感歎詞
- 驚怖感歎詞
- 呼醒感歎詞

敬賞感歎詞とは敬喜賞讃の感情より發するものを云ふ即ちあな、ああ、あつはれ等の類是れなり

其例を擧れば

あな樂し

ああ(嗚呼)樂さかな

あつはれ功名手柄よ

天晴れ御器量よこれぞ弓矢の大將と申すとも不足よあらば』



國語學文典

嗚皇天未だ我を棄てず慮むる今宵の雨を以てす我が計策必ず成らんのみ又悲歎するを要せずと

嗚呼彼年八旬を過ぎ壯勇無雙叱咤奔馳して我軍に當るの類悲慨感歎詞とは悲寂若くは悲慨の情より發するものを云ふ即ちあらあはれ等の類是れなり

其例を擧れば

あら無慘や

嗚呼悲志さかな

あはれ最と寒し

あな苦し

嗚呼遺憾なるかな無念なるかな

嗚今ま生前に其心を用ゆべき事としては只既刑の際に其名を

國語學文典

辱かためざる一事のみとなりし威氏の身の上こそ憐れなれ

嗚呼事茲に此の如し主家の存亡亦計るべからざるなり

嗚呼英雄常は群小の爲めに嫉まれ長策多く長袖の爲めに誤まる

嗚乎天道は是なるか非なるか復我が孤忠を伸ぶる所なしと

嗚呼古往今來財政の紛亂すること此の如きの國あらんやの類

怒罵感歎詞は忿怒若くは嘲笑罵詈の感情より發するものを云ふ即ちあらあはれあつ(叱)ごつ(咄)かか(呵呵)等の類是れなり

其例を擧れば

あら恨めしや今は打たては叶ひ候まじ

嗚呼是れ非を飾るよ巧なるよあらすや交友に信なきものよあらすや

國語學文典

咄彼の凶漢

咄是れ齊東野人の言のみ

嗚乎郎君の説の如きは八尺の農叟南方の黒奴貴國の角觥天下に歌なしと云ふが如し

志つゝ蓄生の蓄生の

此男は何をいふ鼠が酒に酔てたまるものかははははの類

驚怖感歎詞とは驚駭又は畏怖の感情より發するものを即ちあらあ等の類是れなり

其例を擧れば

あら不思議や海上を見れば西國まで亡びし平家の一門各浮び出てたるぞや

あらあら恐ろしの般若聲や

國語學文典

あら浸まきや戦ながら無明の酒の身心まどろむ際も無き内よあらたなりける夢の告げと驚く枕よ雷火亂れ天地も響き風をちこちのたづきも知らぬ山中は覺來なしや恐ろきや枕上は新紙あるを執り通讀少時忽ち愕然と志て曰く嗚呼雨君業ま己は幽蘭女史の事を知るかの類

呼醒感歎詞とは呼びかけ呼び醒ます時よ發するものを云ふ即ちいさいでやよの類是れなり

其例を擧れば

いさ櫻哉も散りなん

鏡山いさ立ち寄りて見て行かん

いさ臨みて見ん山の井の水

いさ行かん

國語學文典

水蔭よなみ居ていざいざ花をながめん  
いで我を人な咎めそ  
いで御消息聞えん

又何よりも切なりしは大雪降て寒かりしよ秘藏せし鉢の木  
を切火よ焚きてあてし志をばいつの世よかは忘るべきいで  
其時の鉢木は梅櫻松よてありしよな其返報よ加賀よ梅田越  
中よ櫻井上野よ松枝合せて三箇の庄子子孫孫よ至るまで相  
違あらざる自筆の状安堵よ取り添へたびければ常世ば之を  
賜りてく三度頂戴仕り是れ見玉へや人々よ初め笑ひし輩  
もこれ程の御氣色さぞ羨ましかるらん  
やよ如何も行方も知らぬ  
やよ起さぬ

國語學文典

やよ待て替はし  
やよ何方へ行きまけん  
やよや待て山時鳥言傳てんの類

冠詞を分ちて体言冠詞用言冠詞の二種と爲す

冠詞の二種  
体言冠詞  
用言冠詞

体言冠詞とは体言の上よ冠らせ置くものを云ふ即ち久堅の天荒  
金の土垂乳根の母千疊破る神百敷の大宮玉鉾の道新玉の年  
空滿つ大和鷓か鳴く東細波や滋賀神風の伊勢不知火の筑紫  
新治筑波春日の春日木の暮間卯月足引の山の久堅荒金垂乳  
根千疊破百敷玉鉾新玉空滿鷓鳴細波神風不知火新治

春日、水暮間、足引等の類是れなり

其例を擧れば

大井の川邊は行幸し給へれば久堅(又堅トハ久ク堅ク變ラサルノ意トモ日ノ刺方ノ意トモ形

ト云フヲツヅメタル詞ニテあめニ掛ケテ云ハ雨ハマロクウツロナルニ思ヒ寄セタル意ナリトモ云フサテ雨ニカクルヨリ凡ヘテ空ノ物即チ天日月星雲嵐光等ノ上(ニ冠ラスルナリ)の空はたなびける雲も無く御幸を待ち流る

る水底は濁れる塵無くてたほん心もそ協ふると詔して仰給ふ事は

久堅の天路は遠し

久方の都をおきて草枕旅行く君を何時とか待たん

それ久方の天といつは二神出世の古へ十方世界を定めしよ空は限りも無ければとて久方の空とは名つけたり

國語學文典

國語學文典

荒金(荒ラキ金ト云フ意ニテ金ハ土ノ下ニ年經)の土の下よて經しもの

久堅の空し霞めば荒金の地も連はず山の端の雪も消え初め水の面の氷も解けて

垂乳根(元トひたらしねト云フ古言ノひヲ省キしトちト通ハシタルモノニテ幼兒ヲ養育スルノ義ナリサテ母ニ掛ケテ云ハ母ハ父ヨリモ幼兒ヲ養フニ專)の母がかふこのまゆ籠り

千磐破(元トいちちはやふる即チ稜威速振ニテ強キ勢ヒヲ云フサレバ神又ハ人ナドニ掛テ云フナリ又神ニ掛ケシヨリ後ニハ金のみ崎加

茂の社ナド神ノ居マス所) 神代も聞かず立田川唐紅は水くぐる

ちはやふる神のい垣も踰えぬへし大宮人の見まく欲しさよ